

現役時代を振り返って

平成 15 年卒 田添 亮

時が経つのは本当に早いもので、卒業してまもなく 10 年が経とうしているのがいまだに信じられない。私が主将を務めた年がちょうど創立 60 周年、慶早戦 50 周年の節目の年であった。

現役時代を振り返ると、慶応バドミントン部は(良い意味で)泥臭さかったなあと思う。

最初の思い出は、初めてのリーグ戦であり、慶応バドミントン部を考える上での原点である。1999 年入部当初は 3 部に位置していたものの、当時は 4 部降格目前の危機的状況にあった。そんな中、60 周年記念誌に寄稿されていた三壁先輩の日大経済戦を目の前で見た。それまで諸先輩から慶応は粘りのプレーが持ち味だと何度も聞かされていたが、三壁先輩のプレーを見て、ああ、こういうことなのかな、と実感した。(一方で、周りのレベルの高いことに驚いた。当時は、大東文化大学の鈴鹿さんのプレーがカッコよく、この人に勝てるようになりたいと強く思ったものだ。)

1 年秋にはシングルスは 3 部では全勝できるようになり、東日本インカレも 32 決めの試合で、あと一歩というところまで善戦していたので、自分の中で、少し頑張ればインカレに出れると慢心してしまったところがあったように思う。普段の練習についても、それなりにきつかったように記憶しているが、自分にとっては物足りなかったのも事実である。今振り返ると、良き仲間にも恵まれていたがゆえに、その居心地の良さから、3 年までは、つつい楽な方(あまり考えることをせず、ただ疲れる練習をすればいいという方向)に流されていたように思う。

4 年になってからは、部活の練習以外で、2

日間に一度は講義の間にもウェイトトレーニングを盛り込み、ランニング、社会人との練習を劇的に増やした。この成果は如実に出た。なぜ、もっと早く取り組まなかったのだろうと今では思うが、卒業までの時間と、インカレでベスト 16 以上に入りたいという目標を考えた時、はじめて自分で考え、実行できたものであり、現役は特に、「大学を 4 年の軸で考えてはいけない。まだ来年があると思ってはいけない。」のだと思う。

きちんとした実績は、3 年時に辻先輩とのダブルスでインカレに出場し、初戦を勝利し、今や日本のエースである佐藤翔治君と佐々木翔君との黄金ダブルスに満足のいく試合ができたことだろう。4 年時は東日本予選で敗れ、インカレ出場することができなかった。しかし、結果的には 4 年の最後の伸びは大きかった。毎日考え、粘り強く地味な努力を続けることで、1 部で活躍する法政や青学のレギュラーにも公式戦で勝てるようになったことは、社会人になってバドミントンを超える上でも自信になった。

前述のとおり、慶応の練習は非常に地味で泥臭いものだった。個人のレベルにばらつきがある中で、羽を打ち合う練習があまり効果的でないと考えから、フィジカルトレーニングが中心であった。バドミントンは強い人のプレーするのが上達への一番の道だと私は当時から今でも思っているが、それでも、当時の慶応の練習でも、もっと考え抜けば、もっと強くなれたと思っている。(日吉での練習量だけでは不足していましたが)。

練習の泥臭さは、試合にも出る。それを一番よく見ることができたのは、三壁先輩のリー

グ戦の試合だった。日大経済戦以降も、芝浦工大のエースや、明治のレギュラーにも、その粘り強さを発揮しリーグで勝利をおさめられており、上手い選手に粘り勝ちする、そういった試合を見るのが楽しくて大好きだった。(ちょっと持ち上げすぎ?)

大学4年間を含め、自分のこれまでのバドミントンの試合で印象深いものを考えた時、「その試合の1本の価値を考え、最後まで粘り強く、泥臭く試合ができたかどうか」が常につきまとう。やはりうまくいった試合や良い記憶がある試合は、全てを出し尽くした試合である。出し尽くさずに残っている試合は、後悔があるからこそ記憶に残っているものだ。

慶応バドミントン部の伝統は?と聞かれたときに、ラグビー部の「魂のタックル」といった格好のいい言葉は思いつかないが、やはり「泥臭く粘りの一本」という言葉に近いものになるのではないだろうか。そこに価値を見出すことができるのが、慶応バドミントン部なのではないかと思えてならない。

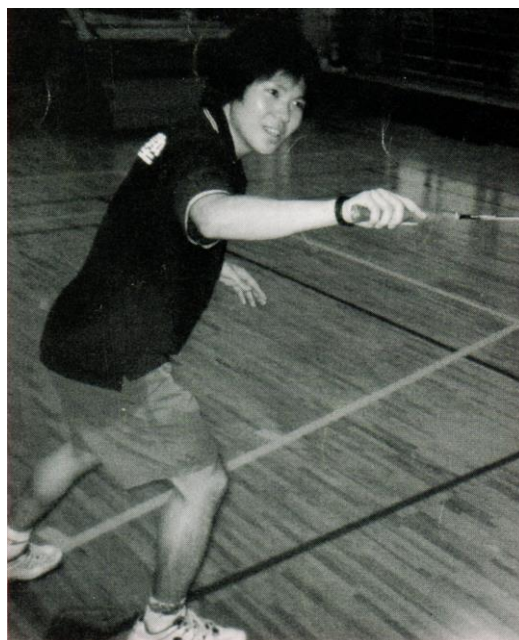
それは華やかなフェイントや切れのあるスマッシュがないから、粘るしかないというのではなく、粘ってとったその一ラリーに試合を動かす力や、道を切り開く可能性があるからだ。そして実際に実行している先輩、後輩がいて、感動させられる。後輩だと、山口・渋谷の早慶戦には感動したし、光井のシングルスはいいねえ

と部外の人から言われ、自分のことのように嬉しかったりもした。

私自身も、卒業後も細々とバドミントン続けながら、日本リーグの3部にあたるチャレンジリーグへの参戦を実現した。泥臭く挑戦してきたつもりでいたが、改めて、仕事でもバドミントンでも「泥臭く粘りの一本」にこだわっているか、もう一度立ち返ってみる必要があるようだ。

少し大げさかもしれないが、人生を変えるぐらいの「泥臭く粘りの一本」が絶対にある。(私自身、中学生の時にそういった1本を経験しました。)

現役の皆さんには、後悔しないためにも、一本にこだわりぬいていただきたい。



平成15年卒 武井 由紀子 (旧姓:永島)

初めて日吉記念館を訪れたときは18歳の乙女だった私も今年めでたく本厄を恐れる32歳。時の流れは年々早くなりバドミントン部で過ごした時間の倍以上の時があつという間に

たち、人生それなりにいろいろあつたが、あの4年間は比類なく濃密な時間であった。

思い出と言えは片付けられないほどたくさん思い出があるが、やはり毎日結果を出す

ために苦しい練習をしてきたのだから、試合に勝利した時の喜びが最も心に残っている。一つは二年のときの慶早戦女子約 20 年振りの 5-0 完全勝利。部員の少ない女子は一年の春リーグから問答無用でリーグに出場、最初は正直試合の重みをあまり理解できずに慶應バドミントン生活をスタートした私だったが、この勝利の時には慶應義塾の名前を背負って戦えることに誇りと幸せをかみしめていた。塾長招待会で見上げた三色旗の下で自分の選択は間違っていなかった、と思ったことをはっきりと覚えている。

もう一つはインカレに出場でき、一つだが勝利できたこと。心のうちにインハイチャンプの後輩、野村に連れてきてもらったという意識が強く、実際はそんなことはなかったのだが会場内で自分が最弱選手だったらどうしよう、などと弱気な心を押さえこみつつ挑んだ試合だったので安堵も大きかったが素直に嬉しかった。

しかし実は慶早戦の勝利も早稲田は日本を背負う選手の岩脇さんが欠場、インカレに行けたのも野村というトップ選手と組めた、という非常にラッキーな面が大きい。

当時はそのことに引け目を感じる瞬間もあったし、実際に直接そう言われることもあり、落ち込みもした。その時は運も実力のうち、と言い聞かせ強引に心を落ち着かせていた。

「運も実力のうち」この言葉よく耳にはするが、4年間勝利の二文字をひたすら追求したことで人生の全てにおいて結果を決めるのは、「運」と「実力」の二つしかないということに気づくことができた。何かと言い訳して他人や何かのせいにしてしがちだが、全ては自分の運と実力の結果、今がある。社会に出て仕事をして結果を求めるのは当たり前だ。お金をもらっているのだから。しかし現役の4年間では誰からも報酬が

出るわけでもなく、極端な言い方をすれば自己満足のために血のにじむ努力をする。また一方で時には社会の中では結果が必ずしも正しく評価されない場面もあるが、試合においてははっきり自分の力が勝負の結果になる。問答無用で見返りなしで徹底的に戦う4年間があったことで、全ての結果は自分次第で自分の出した結果であり、自分に運と実力さえあれば到達できない地点はないと思える人生の強い軸ができたと思う。もちろん何かのせいにしてグチを言うことも多々あるが…

体育会生活で得られたことはたくさんありすぎる。陳腐な言い方かもしれないが、本当に、かけがえのない仲間。先輩方にはいまだにたくさんお世話になっている。あとは体力。現在私はバドミントンから遠ざかってしまい運動らしい運動はしていないのだが、体力は周囲に驚かれるほどある。私の近況としては夢である独立を目標に飲食店で料理を生業としているが、飲食店の仕事は朝から遅いと深夜2時まで立ちっぱなしでそんな生活をもう何年もしている



が、それでも毎日元気に走り回れる。休みのないときはいつそのこと倒れでもしたら休めるかなどと思うこともあるありがたいことにそんな気配は全くない。そんな時は「オールロングとどっちがキツイか」と自問自答、断然今の方がラクつという感じで長い一日も乗り切れてしまうのである。

当時は辛いこともたくさんあったが、4年間で

得られたすべてのことに今は感謝の言葉しか出てこない。とりたてて自慢できることもあまりない私だが、バドミントンを選び、慶應義塾を選び、さらに体育会を選ぶことができた自分の強運を褒めてあげたいと思う。

最後になりましたが、70周年おめでとうございます。

体育会バドミントン部 70周年寄稿文

平成 16 年卒 落合 惇

慶應義塾体育会バドミントン部の創立 70 周年おめでとうございます。諸先輩方が築き上げ、引き継いできた伝統ある部の中で自身の 4 年間で捧げる事が出来た事、素晴らしい同志に出会えた事、そして皆様とこの喜びを分かち合える事を誇りに思っております。

この度、寄稿する機会を頂戴したので、10 年以上前に想いを巡らせて触れてみたいと思う。

小生が入部したのは 2000 年春の事だ。当時、各学年に出身高校(神奈川・桐蔭学園)の先輩方が在籍していた事もあり、入学前から練習に参加させて貰っていた。実は、大学に合格した時には部に入る気は無かったのだが、入学前にあった高校の部の OB 会にて桐蔭出身である体育会バドミントン部の先輩の方々の歓待を受け、酔った勢い(?)もあり入部宣言をした(らしい)。実際は覚えていない。冷静に考えると、日本国の法律と桐蔭学園の素晴らしい先輩方の素行の素晴らしさを考えると、大学入学前の人間が酒を飲むことも飲まされることもあるはずがないので、あれは大学入学前に見た夢か、神様か悪魔からの囁きか何かだっ

たのだと思う。

さて、入部はしたものの、努力をすることもなく漠然と毎日を過ごしていた。半年程すると、毎日大学に行っては練習だけする毎日に疑問を感じてしまい、部を離れてしまった。部を離れている間は、時間を気にせず友達と遊びに行ったり、飲みに行ったり(これも法律上ありえないので妄想だと思う)、部にいる時にやりたいと思っていた事をしてみたが、ちっとも面白くなかった。

そして、部から離れて1カ月半程した 11 月に慶早戦があった。心に何か引っ掛かるものがあったこと、同期の応援でしようと思ったこと、そして、監督に部を辞めることをきちんと言わねばという思いがあり、観戦に行き、仲間が戦う姿を見た。最初は、一観客として、冷めて観ていたが、試合が進み盛り上がるにつれ、コートで戦う先輩・同期と、コートにいない自分との壁のようなものを感じてきていた。そして主将戦で高校の先輩である三壁さんが、早稲田の吉川さん相手に食らいついていく姿を見ている頃には、入れたはずの場にはいない自分への情けなさ、大切な場所を失ってしまったとい

う喪失感を感じていた。試合終了後には逃げるように会場をあとにしていた。その後、もう自分の場所は失わないと心に決め、部に戻りたい旨を先輩に願い出た。

あの時、慶早戦に行っていなかったら、あのまま部を離れていたら、どうなっていたらと未だに考えることがある。結末は分からないが、どこか踏ん切りの付かない気持ち悪いもの心の奥に抱えて大学生活を過ごしていたのではないかと思う。一度は部から逃げ出した自分を、温かく迎えてくれた先輩方・同期には本当に感謝している。

部に戻ってからは、流石に少しは意識が変わって練習するようになった。実績も才能もない自分にはただただ努力しかないと信じていたが、結果は残せなかった。今から思うと、努力していることに満足していて、正しい努力をしているか？という事を突き詰めて考えていなかったと思う。当時は必死に頑張っているつもりだったが、今から思えば、単なる、結果の出ない努力に酔いしれていただけなのかもしれない。

最終学年時には、主将を拝命した。果たして自分で務まるのか？その責務と期待に応えるような責任感も器も自分には無いのではないかと、悩みは尽きなかったが、やるしかなかった。やることはとにかく練習と、当時週に5回だった練習を週に6回にしたり、春・夏の休み中の練習を二部練にしたりした。果たして良かったのか？と、今でも「ああしておけば良かった。自分だけではなく、仲間の大切な時間も奪ってしまったのではないか？」と思うことがある。大学四年の頃の記憶と言えば、悩んだこと、苦しんだこと、それでも前に進むしかないと思ひ、ちょっと進んで、また悩んでしまった記憶が多い。

勿論、後悔ばかりがあるのではない。数々の試合。部の行事。暑い夏の練習後、記念館の外で夕方に風に吹かれて飲むエネルギー。練習後、「とんかつ三田」で店員から怒られるまで、ご飯をお代わりしたこと。吉岡の携帯のアドレスを変えて遊んだこと。バイトをしていた鳥雅での体育会同期との(未だに続けている)交流など、数々ある。特に慶早戦の主将戦は今でも自分の中に強く焼き付いている記憶だ。一緒に苦楽を共にした仲間、森下監督始めとするコーチ陣、そして平日も休日も練習について相談に乗って下さり、バリバリと厳しい練習を課して下さった茂木(鬼)コーチには感謝しています。

大学を卒業した後は、会社に就職し、どんなに困難な仕事に対してでも体育会で養った礼儀作法と不屈の闘志で乗り越えて……などと言うことはない。普通の(ちょっと頭の悪い)社会人だ。中学校位の頃に思っていた「まともな社会人」とは程遠い。

バドミントンはもうプレーしていない。自分にはもう自分の全てを懸けて戦う場がないという事を知っていることもあるし、引退後に気が付いたが、好きで始めたはずのバドミントンが、続けているうちに、余裕もなくなり、いつの間にか好きではなくなってしまうということもある。

自分は4年間で何を得たのだろうか？よく分からない。何かはあるのだろうか、必ずしも部にいたから得られたものでもないだろうし、他のことをしていても得られるものも多いだろう。諸先輩方のように、「自分はやりきった」と言える程でもないし、今更美化しようとも思わない。しかし、色々なものが見ることが出来たことは事実だ。自分の限界・才能、酔っ払った三壁さん、、、見たくはないものの方が多かったが、あ

れだけ打ちこんだから見られたものもあったとも思う。また、悔しい思いをした事、楽しい時間を過ごした事、悩んだ事、苦しんだ事が現在の自分に繋がっている事は事実だ。そして、一度は離れた部に戻ろうと決意したこと、主将として悩んでも苦しくてもそれでも続けようと思えたこと、そういう原動となる何かがあったと思うし、そのような思いが出来たことがなによりも大きなことだと思う。

バドミントン部の益々の発展と、OB の皆様、現役部員、そして将来の部員達の御活躍を祈念し、筆を置かせて頂きます。

最後に、普段は恥ずかしくて言えないのだが、渡邊・朽見・野村・佐倉(女子は旧姓)、本当に有難う。



平成 17 年卒 吉岡 達循

慶應義塾大学バドミントン部創部 70 周年、おめでとうございます。現役部員の顔ぶれとともに、少しずつ形を変えながら、70 年の長きに渡ってバドミントン部が日吉に在り続けていることは、各代の現役部員の練習の積み重ねと、多くのOBOGの方々のご支援の賜物であると思います。また、このたびは 70 周年記念誌に投稿させていただく機会を賜り、光栄に思います。お恥ずかししながら、私のバドミントン及びバドミントン部に関する思い出を、少しばかり振り返らせて頂ければと思います。

【バドミントンとの出会い】

高校時代にバドミントン部に入部し、ラケットを握りました。シャトルがラケットに、まともに当り始めた頃になると、バドミントンの面白さに気付き、のめりこんでしまいました。それから高校 3 年の夏休みまで、飽きることなくバドミントンにのめり込み続けていました。

【慶應義塾体育会バドミントン部との出会い】

高 3 夏休み以降の付け焼刃(?)の受験勉強を経て、慶應義塾大学環境情報学部(SFC)に入学。最初は、体育会に入部することなど全く想像もしておらず(そもそも存在も知らず?)、サークルと授業をやりつつ、中学でかじっていた野球と、高校でやっていたバドミントンサークルに入ろうと思っていました。実際、最初の頃は複数のサークル活動に顔を出していました。しかし、ある日、SFCのバドミントンサークルに、体育会所属の先輩方が顔を出されたことがありました。その時、「SFC生でも体育会バドミントン部に入れるのか!」ということを発見しました。そして後日、2 年先輩の星合先輩に、日吉の記念館へ体育会バドミントン部の練習へ連れて行って頂きました。日吉の記念館が、とても広かったこと、天井が高かったこと、そして部員達が頻繁に声を出して鼓舞しあっていたことを、良く覚えています。

練習参加の初日の練習には、松下君はじめ

日吉の学部に所属していた新生が、4-5人参加していたことを記憶しています(少しずつ同期の部員達が減ってしまったことは残念なことでした)。入部から4年生になるまで、バドミントン部での活動が大学生活のメインでした。藤沢のSFCで授業を2つ3つ受けて、日吉に移動し、練習して、夕食を食べて寝る。この生活が4年間続きました。思い返すとあつという間です。

【バドミントン部での4年間】

1年目はリーグ戦に出ることなんて、夢のまた夢。メンバーチェンジの要員にもなりえなかったように記憶しています。部内でも、その他大勢の1人でした。実力もちろん、その土台となる体力も、まだまだ未成熟でした。

2年目、ささやかながら、リーグ戦レギュラーメンバーへの可能性も見えるようになりました。しかし、軸のメンバーとして勝ち星を稼ぎに行く要員になるなんて、やはり夢のまた夢でした。

3年目、やっと勝ち星を期待される要員になったように思います(あまり勝てませんでしたけど…)

早慶戦を経て、交代があり、我々が最上級生になりました。それまでの最上級生が抜け、部員数が激減しました。先輩・後輩等多くの方々には不安を抱かせてしまっていたように思います(ご心配お掛け致しました)。4年目のこの年、やはり、悔やまれるのはバドミントン部をリーグ4部へ落としてしまったことです。もっと踏ん張ることも出来たように思います。3部にいれば、4部よりも上手の選手と試合をする経験が多く、学ぶことも多いと思います。そのような機会を後輩たちから奪ってしまったことを思うと、申し訳ない気持ちになります。

【慶應義塾体育会バドミントン部での4年間を振り返って】

今回、このようにバドミントン部での4年間を振り返る機会を頂戴したことで、改めてゆっくと総括をする事が出来ました。卒業後、初めてのように思います。4年間を思い返してみても、バドミントン部から3つのことを与えて貰ったということが分かりました。

1つ目に、好きなこと(自分が好きだと思ってたこと)を、「いやになるまで(!?)」やる経験(=継続する力)。

自分は飽きっぽい人間だと思っています。実際、自分の人生の中で、「自分が主体的に選んだことを、何年間もやり続ける」という経験は、バドミントン以外にありません。恥ずかしながら、習い事などは、どれも長続きしたものはありませんでした。ですから、なにはともあれ「4年間(高校含めて7年間)、バドミントンを続けられた」という事実は、今でも、辛いことがあったり、諦めたくなった時の、「つかえ棒」になっているように思います。

2つ目に、挫折感を味わっても、すぐに立ち直る力(=雑草魂≠負け犬根性)。

計算したことはありませんが、おそらく私の4年間の対外試合の通算成績は、負け越していると思います。「頑張ってる練習しているつもりなのだが、もっと頑張っている人たちがいるみたいだ」「結構センス有ると思っていたが、もっともっとセンスの良い人たちが沢山いるみたいだ」などなど、色々と挫折感を味わう経験の方が多かったように思います。それでも立ち直って、また次の目標に向けて練習をリスタートする。精神的なタフさを培うことが出来たように思います。但し、負け試合での反省事項をしっかりと受け止めて、次に活かすことをもっと重視すれば、もっともっと上手くなることができたという後悔

があります。これは反省事項の1つです。

そして最後に、今も親交が続いている仲間（同期の松下や、先輩・後輩たち）を与えて貰いました。今も時々集まっては、楽しくお酒をご一緒させてもらっています。また今の妻にも、バドミントン部で出会うことが出来ました。このように、バドミントン部で出会った方々との人間関係は、社会人になってからの人間関係とは一味違い、かけがえのないものです。一生大切にしたいものです。

【近況】

慶應義塾大学環境情報学部を卒業後、大学院に進みました。2年間の修士課程を経てから、証券会社（現シティグループ証券株式会社）に入社しました。その会社では海外駐在（英国）を経験させて頂き、3年目に現在所属しております経営戦略コンサルティング会社（ボストン・コンサルティング・グループ）に転職

致しました。自分の実力不足もあり、日々長時間労働及び失敗・反省続きの日々を送っております。それでもあきらめずに継続出来ているのは、やはり、バドミントン部での4年間の経験が有るからだと思います。

大変申し訳ないことに、現状、忙しさを理由にしてしまい、日吉記念館から足が遠のいてしまっております。ですが、毎年必ず4回（1シーズンに1回）は、顔を出させていただけるとなりたいと思います。



体育会での反省と感謝

平成 17 年卒 松下 光旗

まず、70周年記念部誌にあたり、多大なご尽力をされた担当の方々に御礼申し上げます。

私が部を引退した年は2005年、それから7年経っても、当時の事をよく思い出すのは、それだけ私にとって、得られるものが多い、充実した期間を過ごすことができたからだと思っています。

私が入部を決めたのは、高校時代、地元長崎でカリスマ的な存在だった田添さんに勧誘して頂いた事がきっかけでした。監督やOBの方々の存在、関東のレベルの高さ等を伺い、

「この環境で思い切りバドミントンをやってみたい」と思いました。田添さんには入部後も大変お世話になり、多くの事を学ばせて頂きました。

意気込んで入部したものの、現役時代を振り返ってみると、「全然、誇れる成果を残せなかったな」というのが本音です。最も悔やまれるのは、4年の春リーグで4部降格した事に加え、その後の秋リーグで3部への復帰が果たせなかったことです。様々な要因はあったとは思いますが、チームの勝敗が決まる大事な場面で、尽く私が負けてしまった事を考えると、自分の

力不足だったとしか言い様がありません。

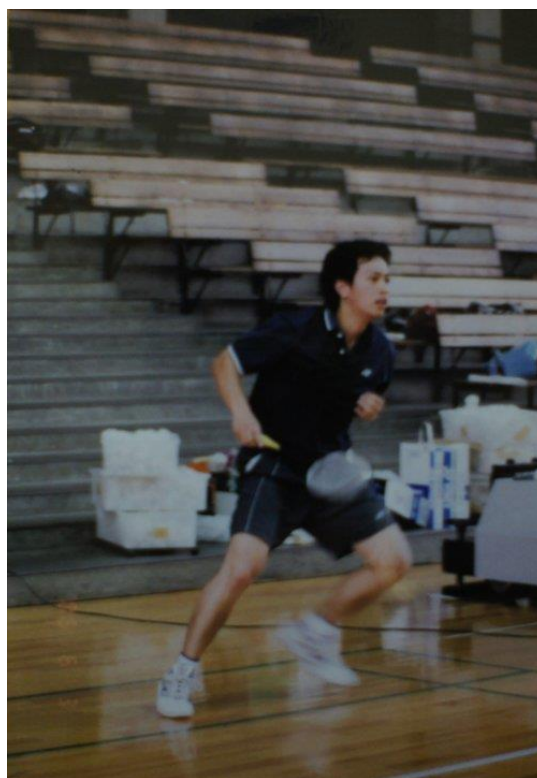
私は4年間継続してモチベーションを保つことはできませんでした。2,3年次は怪我をきっかけに、伸び悩み、あきらめのような気持ちも感じてしまっていました。これが最後の4年で4部降格という結果に繋がってしまったと思っています。今でも時々それがどうしてだったのかと思ひ返しますが、以下の3つのような理由があったかと思っています。

1 つ目は、うまくいかないときに、やり方を変えてみる事でした。私は現役時代、バドミントンは強いショットを打って勝っていくものだと考えていましたが、もう少しプレーの幅を広げることを考えていたら、ここの勝負の時に、役に立ったかなと。

2 つ目は仲間との本音のコミュニケーションが不足していた事。自分が悩んでいた時、自分だけの力で解決しようとしていました。今でも飲みに行ったりできる素晴らしい仲間の存在を考えると、このような悩みをもう少し相談していればと感じる時もあります。

3 つ目は長期的、継続的に練習の計画を立てていなかった事。リーグ戦に向け、この期間は何に注力して練習するか、中間テスト的な位置づけで試合に出てみる等、考えていれば、目標に対して、自分の力を上げるための具体的な行動をとれたらと思うと思います。

ネガティブな記述が続きましたが、部活動を4年間やり遂げたことは、私にとってかけがえのない財産となっております。3年の冬には部員が5名(吉岡、坂根、小粥、広田、私)しかいないという部の存続の危機もありました。私以外は皆、就活やダブルスクールとの両立、初心者や長いブランク明けとった、練習するのに厳しい環境にあったかと思っています。そういった中で、お互いに協力、励ましあい、乗り越えら



れた事を彼らに感謝したいと思います。特に同期である吉岡とは互いに切磋琢磨し、唯一の同期ではありましたが、大きな刺激を受けました。

当時、OBの方々にも多大なご協力を頂きました。特に、コーチだった茂木さんには、千葉の合宿に会社を休んでフル参加して頂き、本当に頭が上がりません。これは自らが社会人になった今、更に痛感しています。おかげで少人数ならではの充実した合宿を送ることができたと思います。

また、OBの方々の協力を受け、他の強豪校の練習にも参加させて頂きました。筑波大学での練習では現在、日本代表として活躍されている池田信太郎さんとゲーム練ができ、具体的なアドバイスも頂きました。また、夜は筑波の学生の家に宿泊させてもらい、様々な話をできたことも良い思い出です。筑波以外にも、明治や法政の方々にもお世話になり、バドマガで

見たことある選手と練習や話をし、新たな気づきを得ることができました。

異なった環境で練習をすることの大切さを感じ、自らも、早慶戦で交流のある早稲田大学や、OBの方々のクラブチームに参加する等、成長の場を求めて積極的に動いていく姿勢を学ぶことができました。

このように、周りの方々のご協力もあり、4年次には、3部復帰は果たせなかったものの、バドミントンの実力は大きく伸ばすことができたかと思っております。振り返ってみると、4年間続けることができたのは、周りの方々のご協力があったからこそだと感じております。

現在、私は自動車メーカーでエンジニアとして働いております。自動車は複雑なシステムとなっており、様々な分野の人達を巻き込みながら仕事を進めなければなりません。そういっ

た仕事の中で、体育会で学んだ、自ら積極的に動くことや最後までやり遂げること等が活かしているのかなと感じております。静岡在住ということもあり、近年は部から離れてしまっています。この文章を書きながら、年齢の離れたOBとの関わりは体育会ならではの、受けた影響も大きかったなと思い返しています。近々、何らかの形で恩返しができるかと思っております。



慶應義塾体育会バドミントン部創部70周年に寄せて～60年から70年の間で～

平成18年卒 坂根 洋介

慶應義塾体育会バドミントン部創部70周年おめでとうございます。良いプレーヤーではなかった私ですが、日本で一番の歴史を誇る塾バドミントン部の一員として4年間を過ごせたことを誇りに感じております。偉大な先輩方も寄稿される中で、私を書くべきことは何かと考えると、やはり部員が少なかった時期のことを中心として書かせていただきたいと思えます。

平成24年1月現在、塾バドミントン部の部員は4年生を除いても20名を超す大所帯となっています。そのような塾バドミントン部の活気あふれる様子を見たり、聞いたりすると、まさに「隔世の感」を感じずにはられません。

ほぼ10年前の平成15年の慶早戦後、4年

生が抜け、部員は5名にまでなりました。主将の吉岡先輩、副将の松下先輩(いずれもH17年卒)、広田、小粥(いずれもH19年卒)に自分という状況です。五月女監督をはじめとした監督、コーチの先輩方の危機感は相当だったと思います。リーグの2複3単を考えると、本当にギリギリの人数です。まさに危機的状況でした。

このような非常に厳しい状況下にあって、私自身が強く感じたのは、塾バドミントン部の連帯感です。OB・OGの方をはじめ、本当に多くの塾バドミントン部とつながりのある方に支えられました。厳しい状況にあることを知った先輩方が多く来てくださいました。徐々に日吉まで

足を運んでくださった方、合宿に来てくださった方、お家に呼んでくださった方、飲みを誘ってくださった方…、本当に多くの先輩方にお世話になったと感じています。先輩方が、塾バドミントン部のためにしてくださったことは、あらためて日本で一番歴史のある塾バドミントン部の連帯感を感じる機会になりました。

厳しい状況の塾バドミントン部にあって、OB・OGの先輩方、当時の選手があらためて意識して一緒に進み、苦難を乗り越えられたことは、塾バドミントン部の一つのポイントになっているのではないかと感じるどころです。

5人のとき、本当に苦しかった。そんな中でも、多くのOB・OGの先輩方、ともに練習してきた先輩後輩がいてくれたからこそ、続けていられたと、当時のことを寄稿する中で実感しています。引退後、当時から指揮をとっておられた五月女監督(S60卒)に4年間の一番の思い出は何かと聞かれた際、「富津での合宿です」と答えた覚えがあります。久々の外での合宿だったこと、全日程で有給休暇をとってくださった茂木コーチ(H4卒)とともに過ごしたこと、5人全員一部屋だったこと、合宿最終日のラストの2:1回しで五月女監督と喜多さん(H2卒)に相手していただいたオールショートにおいて、お二人にめっちゃくちゃ翻弄されたこと…、たくさ

んの思い出があります。

たくさんの先輩の方々にお世話になりながら、日吉に足を運ぶことも少なく、プレーでも現役の相手はできない状況で、非常に申し訳ないと思っておりますが、引退しても、後輩たちの結果に一喜一憂し、高井さん(S36卒)の撮ってくださる現役のプレー写真に元気をもらっております。

塾バドミントン部のOBのサポーターとして、日本で一番伝統ある塾バドミントン部が、バドミントン界でこれからも脈々と歴史を刻んでいくことを心から願っております。そして最後に、ろくな成果を残していない私が言うのもなんなのですが、いつか慶早戦で現役が早稲田に勝つシーンを見るのも願いの一つです。そのためにも少しでも現役のために何かできればと思います。



四年間の振り返りと今感じていること

<初めにー祝辞ー>

慶應義塾体育会バドミントン部が創部70周年の記念の年を迎えますことを心よりお祝い申し上げます。また、バドミントン部がこの節目の年を迎えるにあたり、これまで部の活動にご尽

～継続と伝統. 伝統に省みる部の強さ～

平成 19 年卒 広田 崇

力下さった多くの先輩方、そして関係者各位に感謝申し上げます。

ここでは、本誌の目的にもある様に、このバドミントン部に於ける直近10年の活動を当事者の言葉で残すこと、そして、伝えることを主眼と

して、創部64年目の卒業生にあたる私から、自身の四年間の振り返りとその上で現在感じていることについて書かせて頂きたいと思います。お見苦しい表現など多々あるとは存じますが、ご容赦賜りたく存じます。

<四年間の振り返り>

入部当初、とてつもなく下手糞で、かつ、大学に入るのに何年も要し、文武両道で言えばその両面において劣っていた私が、“自分の可能性に挑戦した”のが、私の体育会バドミントン部における四年間でした。

体育会では戦績が何より求められるのは周知の事実です。その点に於いて私は、中学からの長いブランク明けで入部したということもあり、大きなハンデを背負ってのスタートとなりました。ドロップ交互が出来なかったこと、2:1の対人練習をやったことがなくやり方が分からなかったこと、入部するまで高校のマラソン大会以外でランニングをしたことがなかったこと、腕立て伏せが出来なかったことなど、当時の私には基礎体力や運動神経というものがまるでなく、体育会としては“分不相応な存在”でした。しかし、それでもバドミントンが強くなりたい、体育会でやりたいという思いから、仲間と共に関東大学リーグの3部という目標へと挑戦し続けました。しかし、その過程は辛く、挫けそうになる場面の連続でした。

私が1年生から2年生になる2004年の春、バドミントン部は現役部員が5名しかいないという危機的状況を迎えておりました。部員数が30名を超えた2011年現在からは想像することは難しいですが、当時は本当に人数が少なく、また女子部員に至っては一人もおらず、実力的にも人数的にも追い込まれていました。練習をするのに必要なコートが1面だけで済むことも

多々ありましたし、参加したOBの方が現役部員の数を上回るということもありました。肝心のプレーでもOBの方々(森下先輩、小柳先輩、茂木先輩、巽先輩、立田先輩、川野先輩、岩部先輩)には勝てない日が続き、一体どちらが現役なんだと当時はよく揶揄されたりもしました。しかし、時間が経ち、リーグ戦が近付くにつれ、実力が不十分な状態でリーグ戦のコートに立つという不安と、毎日の厳しい練習からくる疲労によるネガティブな感情が交錯し、釈然としない日々を送っていたように思います。



五大学OB戦*レセプションにて(於:法政大学)

※現東京六大学バドミントン交流戦

迎えた2004年の春リーグ。新しく加わった小池君と共にレギュラーとしてダブルスのコートに立ちましたが、3部の選手相手に手も足も出せずに惨敗し、結果、当時として史上最低の4部降格という成績を記録してしまいました。この時は、可能性に挑戦するどころか慶應義塾の「伝統」に泥を塗ってしまったと恥ずかしく不甲斐ないばかりで、まさに針の筵に座る気持ちでした。

どうして勝てないのか、何をしたら強くなるのか、ぐちゃぐちゃでも構わないからとにかく勝ちたい、実績もなくプライドもない私たちが3部に

挑戦しようとする事すら本来ならおこがましいことだったのかもしれませんが、先輩たちと目指した3部昇格へかける意欲は卒業するまでの以降3年間消えることはありませんでした。

4部降格という悔しさをバネに、練習やトレーニングを重ね、オフ期間にも苦手なランニングをし、嫌いな理工階段のダッシュを何本もしました。練習後にはクラブチームに通い、少しでも強い人と練習して強くなろうと努力しました。しかし、以降のリーグ戦でも、3期連続で4部2位という結果に終わり、主将を拝命した最終学年でも悲願を達成することは出来ず、悔しさと後悔が残る四年間となりました。

春リーグであと1ポイントで優勝という場面で芝浦工業大学に敗退し、小杉OB会長の前で泣き崩れたこと。リーグ戦の試合後のエールで声にならない声を絞り出しむせび泣いたこと。そして、秋のリーグでも敗戦し、優勝して歓喜に湧く茨城大学を遠めに見ながら、茫然自失として目に映っていたあの時の記念館の光景。いずれも鮮明に今尚目に焼きついています。

このように、私は3部昇格を達成出来ないまま、私の可能性への挑戦はクローズしました。しかし、体育会バドミントン部という括りで見れば、その可能性への挑戦は終わっていません。それは、手塚君の代で昇格した様に、そしてその後もリーグ戦において後輩諸君が活躍している様に、バドミントン部は個々人の四年間に制約を受けることがないからです。

引退後、私は慶應義塾の伝統の意味を知り、伝統を紡ぐ塾バドミントン部の一員として、組織活動に携わろうと思える様になりました。巨視的に見れば、私が過ごした四年間や部員が少なかった時期、4部降格等は、70年という長い年月に於ける、ほんの僅かな期間に過ぎず、バドミントン部の70年には先輩達そして後輩達

の歩みが凝縮されています。また、「私(=個)」が過ごした四年間を一つの断片として、「部の関係者(先輩、後輩)」が同じ様に個々の四年間を紡ぎ、一致団結することで成す「バドミントン部(=和)」という組織自体も、同じ様に辛い時を経て、継続を積み重ねてきたからこそ、創部70年という「伝統」に繋がっていると感じています。

<今感じていること>

そして私は、ここに代々の「継続」ゆえに築かれた我が部の「伝統」があると思うのです。

私が四年間を通して可能性へ挑戦し続けることが出来たのは、私には仲間がいて、諸先輩方がサポートして下さったお蔭であるというのが主観的な意見であります。

先ほど史上最低の成績を収めたと書き記した様に、「バドミントン部」は過去に於いて此程までに悪い時代を経験したことはありませんでした。それ故に、未だ経験したことがない未曾有の苦難に今まさに直面しております。そして、その様な苦しい時だからこそ、自身が苦しい時にサポートして頂いた経験からも、現役・OB・OGが一致団結して、この苦難を乗り越えようと努力することで「バドミントン部」がより強固な組織へと変わっていく必要があると思うのです。

「個」として四年間活動を継続させたOBである「私達(特に直近10年の卒業生)」は、辛い時代を過ごしてきた経験を分かち合いながら、これからの将来に向けて、「バドミントン部」がより高みを目指せる様に、組織活動のサポートをし、「部」の「伝統」を継続させていける様にクラブ活動に協力していく必要があると私は強く思います。是非これまでOB会活動に積極的であった方もそうではなかった方も、そしてこれから卒業してOB会に入る方も、今一度「伝統」の意

味を考えてみては如何でしょうか。“慶應義塾には、様々な苦難を乗り越え継続してきたからこそ「伝統」があり、「伝統」があるが故の強さがある”といつか言われるよう皆で努力をしていきましょう。

<終わりに—近況と結び>

私は現在、日産自動車でEVパワートレインの研究開発をしています。仕事の傍らでは、会社のバドミントン部に所属し、神奈川の実業団リーグや全日本実業団での上位進出を目指してバドミントンの練習を継続しています。限られた制約の中で仕事とプレーの両面に精を出せる充実した毎日です。

チームのレギュラーになるには3年かかりましたが、大学時代に培った泥臭さと、何事においても一生懸命努力することだけは今でも私の強い武器となっているように感じています。

学生当時の仲間で、関東圏で仕事をし、プレーを継続している人間が少ないことに侘しさを抱きつつも、現役諸君の活躍を卒業した今でも傍らで、かつ同じプレーヤーとしてみる事が出来、時代は違いつながら慶應義塾が同じように脈々と続いていることを肌で感じるとともに、言葉に出来ない幸せを感じています。近い将来、強い慶應義塾の復活を夢見る一人の

OBとして今後もサポートを続けていきます。

最後になりますが、本誌の編集活動にご尽力下さった草場先輩を初めとした編集委員の皆様、そして、寄稿にご協力下さった皆様に本記念誌の編集長として御礼を申し上げますと共に、私の大学四年間から現在に至るまで、ご指導賜り、お世話になった先輩諸兄、同期の小粥君、小池君、そして後輩諸君に心から御礼を申し上げたいと思います。

慶應義塾体育会バドミントン部の今後益々の発展を祈念し、結びの言葉とかがえさせていただきます。

—以上



第61回全日本実業団(2011年6月 於:金沢市)
対 北九州市役所(手前:広田)

平成 19 年卒 小粥 貴善

入部前、特に運動部に所属した経験の無い私は、「体育会」がいかなる組織かもよく分かっていなかった。にもかかわらず、入部を決めた理由は、単純にバドミントンが面白いと思っていただけだった。今にして思えば、バドミントンの難しさや厳しいトレーニングなどを良く知らなかったからこそ入部できたように思う。また、そ

のような初心者である私の入部を許可してくれた諸先輩方には感謝する次第である。

入部後、それまでの人生とは全く異なる生活をおくることになった。それまで大半の時間を勉強や遊びに費やしてきたが、部活中心の生活へと変わった。

入部当初、多くの先輩方に基礎から教えて

いただいた。ラケットの握り方から素振りやフットワークなどの基本を、空いている人が交代で私に教えてくれた。全体練習以外でも、同期の広田が基礎打ちの相手をしてくれていた。練習の強度は軽かったにもかかわらず、全身が筋肉痛になり階段を昇り降りすることさえ辛かったのは今でも覚えている。

練習のみならず、社会的な側面でもいろいろ勉強させていただいた。練習中のみならず、練習外にも仕事がたくさんあった。練習開始の1時間ほど前から、ネットの設置やモップがけをし、復唱の当番であれば主将に練習開始時間と場所を確認し全体へ展開するなどを行った。練習終了後もシャトルの選別や整理などを行った。また、新歓や合宿、追いコンなどの各種イベントでは部旗をはり、飲み会終了後は先輩が出る前に店の玄関付近に整列するなど、いろいろな作法や文化を理解し、実行することは大変だった。「どこまでが伝統でどこまでが古い慣習なのかは分からないが、おそらくやらねばならない」ことに従事するのは、社会を知る良いきっかけになった。

部活の時間以外でも、食べるものから睡眠時間にいたるまで、現役当時はいろいろなことが気になっていた。特に勉強との兼ね合いは辛く、常に時間との戦いだった。体力の回復のためには寝たいが、課題が終わるまで寝られないという日々が続いた。後輩の吉永を初め、周囲の協力無しでは教職の免許を取得することはおろか留年なく卒業することなどとてもできなかった。

勿論大変だったことばかりではなく、良いこともたくさんあった。特に、私が1年生の時の春合宿の時のように、千葉の民宿へ泊り込みで

参加していただけたことは有り難かった。直接参加していただけなくとも、アルコールなど(!)の差し入れなどでもお世話になった。大学を卒業してしまうと、現役の相手をできるだけ体力と技術力を維持することが非常に大変だし、それでもOB・OGに勝てていなかった当時現役の自分たちが不甲斐なかったと思う。

卒業後は大学院で2年研究を行い、企業の研究所へ就職した。バドミントンと研究・開発ではジャンルが異なるものの、基本的な技術の一つ一つ身につける必要性や周囲の人と協力して一つの仕事をを行うという意味では共通点があるので、部活での経験は今の仕事でも役に立っていると思う。周囲の協力を得ることと自分自身のスキルアップとは必ずしも整合性のとれない部分があるものの、限られた時間との兼ね合いで意思決定と実行を自然に行っている。これは、部活で時間に追われながら生活した経験があったおかげではないかと感じている。

多くの先輩、同期、後輩のおかげで成長できた。私がバドミントンのプレーで恩返しなどはとてもできないが、これから入部してくる後輩達のためにできることをしたい。



現役時代を振り返って～3部昇格に懸けた4年間～

平成 20 年卒 手塚純平

慶應義塾体育会バドミントン部がその歴史と伝統を受け継ぎ、創部 70 周年を迎えますこと、心よりお喜び申し上げます。また、記念すべき部誌の発行にあたり、OBの一員として寄稿できますこと、誠に嬉しく思っております。

さて、今回の執筆のお話を頂戴して、改めて自分自身の現役時代4年間を振り返ってみますと、まさに「3部昇格に懸けた4年間」であったと言えます。先輩方の想い・バトンを受け継ぎ、3部昇格、そして強い慶應の復活に向けて、突っ走ってきた4年間でした。

思えば、私が入学した時、部員は男子5名だけでした。そして、3部で迎えた大学最初の春リーグ・帝京大学戦の第3シングルスにいきなり出場させていただきました。しかし、結果は2-0のストレート負け、しかも、うち1ゲームは1点も奪えないという完敗でした。全くチームに貢献できないまま、長いバドミントン部の歴史の中で初めて4部降格という屈辱を味わいました。

そこから、3部昇格への厳しい道のりが始まりました。1・2年生の頃は、上級生の足を引っ張らないようにと、死に物狂いで食らいついていきました。チームのために出来ることなら、少ない部員の中での下級生の役割である雑務も、同期と力を合わせてこなしてきました。

しかし、あと一歩のところまで「4部優勝」という壁を越えることができず、涙を吞んできました。何より、上級生の悔し涙を目の当たりにして、チームの勝利に貢献できない自分自身の不甲斐なさに悔しい思いをたくさんしてきました。

そして、私が主将のバトンを引き継ぐ、大学3年生の時の早慶戦。レセプションの後に、最

上級生から最後のメッセージが贈られた後、私はこれまでの人生で一番といっても過言でないほど、人目もはばからず泣きじゃくりました。これは、大変お世話になった広田主将の代の先輩方が卒業することの寂しさや心細さはもちろんのこと、それ以上に先輩方と3部で戦うことが出来なかった悔しさ、そして、大切な試合で勝ち続けることが出来なかった自分自身の力不足が許せなくなって、感情を抑えきれなくなったからです。この時、より一層、絶対に3部昇格を成し遂げるという想いは強くなっていました。

このような想いになれたのは、バドミントン部の「絆」を感じることができていたからだと思います。いつも想いを1つにし、目標に向かってチームを引っ張ってくれた上級生。バドミントン部の歴史・伝統を築き、現役部員に対して時に優しく、温かく、そして時に厳しくご指導いただいたOBの皆様。嬉しいこと、楽しいこと、辛いこと、悲しいこと、全ての同じ時を共にした同期の仲間。生意気だけど、勝利に対して貪欲で、向上心の高い愉快的な後輩たち。全てのバドミントン部の関係者の皆様との「絆」や想いが、自分自身にとってとても大切なものになっていたからこそ、絶対に3部昇格を成し遂げ、強い慶應を復活させるという確たる信念へとつながったと思います。

私が男子部主将に就任した時の目標は、リーグ戦5試合全て5-0で勝利し、3部に昇格することでした。つまり、25連勝して入替戦に臨み、3部昇格まで駆け上がることでした。これは、勝ち続けることの厳しさを経験から肌で感じ、3部昇格のためには並大抵の気持ちでは

乗り越えられないと考えたからです。そして、それは上級生や試合で勝てるメンバーだけが持てばいい気持ちではなく、チーム全体で共有しなければならない気持であると考えたからこそ、誰が試合に出ても負けられない極限の状況、そのためにチーム全員がチームをサポートし合う気持ちを持っている状況を生み出したかったからです。何より、先輩方から受け継いだバトンの重みを感じ、強い慶應を復活させる足がかりにするという「夢」があったからです。

そして、この無謀と思われた挑戦を後押ししてくれたのは、やはりバドミントン部の「絆」でした。たくさんのOBの諸先輩に温かくも厳しいご指導を頂戴し、応援していただきました。突っ走っていた私をいつもフォローし、チームの「和」を生み出してくれた同期の仲間がいました。とても厳しく接してきた後輩たちも、目標達成が出来ると信じて付いてきてくれ、チームはあらゆる場面で1人1人が主役となって、チームの力になれるようにと自ら考え、行動できるチームへと成長していきました。

その結果、リーグ戦では惜しくも1試合だけ落としますが、22勝1敗という成績で優勝し、入替戦2試合も3-0で勝利し、3部昇格を達成することができました。そして、3部昇格を決めた入替戦当日は、試合会場となった千葉商科大学まで本当にたくさんのOBの皆様に応援に駆けつけていただいたり、メーリングリストでたくさんのお祝いのメールを頂戴したりしました。また、高井先輩には「3部昇格記念DVD」を作成いただき、今でも大切に見ています。この時も、改めてバドミントン部の「絆」を感じると共に、OBの皆様のバドミントン部への熱い想いを肌で感じました。

私は、4年間の集大成として、3部昇格という



結果を残し、有終の美を飾ることが出来ましたが、これは先輩方から受け継いできた伝統や歴史・想いなくしては実現できないものでした。先輩方からたくさんのことを学び、多くの経験をさせていただいてきたからこそその結果でもありました。だからこそ、現役を退いても、強い慶應義塾体育会バドミントン部の復活を願う「絆」を大切にしていきたい、自分を育てていただいたバドミントン部に恩返しができるように、いつまでも携わっていたいという想いが芽生えました。

それは社会人になっても同じで、結果こそ残せませんでした。コーチや男子監督代理という立場を務めさせていただいたり、日吉に顔を出して後輩たちと一緒に汗を流したりしてきました。今は仕事の関係で札幌に転勤となり、なかなかバドミントン部に携わることも難しい状況にありますが、それでも自分にできることはないか考えて行動を起こしていきたいと思っています。

強い「絆」で結ばれたバドミントン部の皆様と同じように、強い慶應義塾体育会バドミントン部の復活を心から願い、いつでも現役部員のことを応援しています。それは、強い慶應義塾体育会バドミントン部の復活を体現できるのは、私には出来なくて現役部員にしか出来ないからです。だから、いつも現役部員の試合結果

は自分のことのように見て一喜一憂し、遠く札幌から応援しています。そして、私も現役部員にばかり頼るのではなく、創部 70 周年という輝かしい歴史や伝統を受け継いでいくことが出来るOBとなれるように、自分自身も精進していきたいと思っています。

また勝利の美酒に酔いしれたいという「夢」



を心に抱き、いつまでも慶應義塾体育会バドミントン部を応援し、勝利を祈念致しております。頑張れ、慶應義塾体育会バドミントン部！

最後になりますが、70 周年部誌の発行にあたりご尽力いただきました関係者の皆様に、厚く御礼申し上げます。

70周年記念部誌への寄稿文

平成20年卒 中村 翔一

大学に入学して何をやろうか、大学に入学してもバドミントンをやりたいと思った。高校時代で山田善康先生にバドミントンを教えてもらった。山田先生にバドミントンに対して本気に取り組むことを教えてもらった。山田先生に共にお世話になった高校の先輩でもある小池徹先輩がすでに、入部を決意していた。バドミントン部に入って大学生活を送ろうと決心した。

大学2年、3年で早慶戦で勝利できたことが一番印象深い。2 年連続で同じ相手と同じ山

口悦伺君をパートナーとして組んで試合を行い、2 年連続で勝利することができた。

1 年生の時に、早慶戦に出させてもらって、とても悔しい思いをした。第一試合のシングルスで出場した時、早慶戦の異様な空気を感じていた。非常に緊張し、空気が重く感じた。試合ではいいところなんて一つもない、こちらが相手に決められると観客席からのため息のようなものが聞こえてきた。試合が終わった後、当時主将の吉岡達循先輩が「来年は絶対勝とう

な」と励ましてくれた。その時感じた思いが翌年の結果に繋がった。

4年間苦楽を共にした同期には非常に恵まれている。僕の代には5人の同期がいる。みんな、思いやりのある、素晴らしい人たちだ。そんな同期と一緒に4年間部活動を行えたことは非常にありがたかった。

大学4年生の一年間はとても充実していた。主将であった手塚純平を中心に後輩達を含め僕らのチームは同じ目標に向かっていて、そして、3部昇格することができた。

中部遠征の企画も、多くのOB、OGの方の協力のもとなんとか、やり遂げたことができた。大学4年間バドミントン部に在籍できたことは一生のどの期間でもえられない貴重な時間であった。

社会人になって4年目がもうすぐ終わる。転勤を3度経験している。相手を変え、土地を変え仕事をするのに慣れてきた。どこにいてもやることは一緒。しかし、転勤するたびに別れが訪れる。もうここでは仕事はできない、一緒に生活してきた人達と同じ時間を同じ場所で共有することは難しい。いつでも変わらず帰っている場所が欲しい。どこにいても、慶應義塾

体育会バドミントン部は僕にとって帰りたい場所である。迎えてくれる仲間がいる。そんな組織があるということはとても嬉しい。慶應義塾体育会バドミントン部ファミリーの一員として一生関わり続けたい。慶應義塾体育会バドミントン部がさらに発展し続けることを心から願います。



主務

慶應義塾体育会バドミントン部70年の長い歴史には、いつの時代も「主務」という役職があったことをここに記録しておきたい。

チームの「主」役でありながら、チームを先導する「主将」のように華々しくなく、目立つこととは限りなく縁遠い役職。「主将」が「表」舞台に立つならば、「主務」には「裏」方に徹するとい

平成20年卒 吉永 裕貴

う表現が最も相応しい。仕事は滞りなくこなして当たり前。むしろ滞りがあればすぐにクレームの対象となる。あまりに人から見えない「裏」過ぎて、主務を始めとするマネージャー陣が普段どのような仕事を務めているか、大抵の人は知らないのではないか。もしかしたら、これを経験した者にしか理解されないかもしれない。し

かし私は、この役職に就くことができ良かったと思っている。貴重な体験を人一倍させていただいた。それに感謝する意味でも、そのような貴重な体験のできるマネージャーという役職に良いイメージを持ってもらう意味でも、普段目立たない「主務」が、どのような思いでチームに携わっているか、私の体験談をもとに少し知ってもらおう。

先輩から代を引き継ぎ、我々同期 5 人がチームの最上級生となった。そして部員みんなの前で話した、「主務」としての所信表明。「このチームを引っ張る最上級生、特に主将が、チームを強くすることに専念できるよう、他の全ての運営は自分がやるから心配せずに任せて欲しい」。それがこの役職に込めた思いだった。

一口に「他の全ての運営」と言っても、その仕事は多岐に亘る。

まずは年中行事の企画・準備、進行・運営、事後処理。1 月、新年会。「第 2 回関場杯争奪塾内対抗バドミントン大会」の企画、進行から、1 年の仕事がスタートした。幼稚舎、中等部、塾高、女子高、大学、OBOG の総勢百余名が日吉記念館に一堂に会し、盛大に執り行われた。大学生だけでなく、付属校バドミントン部から、自分の祖父に当たるような大先輩までが、バドミントンという共通のスポーツを通して触れ合うことができるのも、慶應義塾ならではの醍醐味。自分が、そうした人々を集め、声を掛け、接する機会を、他の部員より多く経験することができたのも、この役職に携わっていたお陰である。

次の行事は 3 月、卒業生送別会。お忙しい中 20 名もの先輩方にお越しいただき、現役部員と合わせると 45 名！広田、小粥、小池 3 先輩を無事送り出すことができた。

5 月、「バドミントン部部長交代式並びに、新入部員歓迎会並びに、春季リーグ戦祝勝会」。会合の段取りも自分で確認できるようになり、司会役が少し板に付いてきた頃にやってきた、一度に三つもの会を兼ねる大きなイベントだった。マイクを握る手にも自然と力が入り、それと同時に、人前で話すことに少し快感を覚えた瞬間だった。

8 月。10 月末の慶早戦で大成功を収めるには、この時期から準備を始めないと間に合わない。早稲田マネージャー陣との打ち合わせ、印刷会社との交渉、パンフレットの寄稿文依頼、広告依頼・回収、校正、会場手配・準備、付属校生・先輩方へのお誘い……。やるべきことは山積し、ここに挙げたらきりが無い。さらに、昨年の塗り直しでは意味がないと、新たな企画を打ちたてようものなら、連日徹夜の日々が続くことになった。

そして 10 月の慶早戦本番を迎える。前日の慶早現役合同リハーサルで最終確認し、準備がうまく行ったからと言って、満足することは許されない。確認に確認を重ね、当日も決して気は抜けない。大会後にも、各料金の支払い、パンフレットの配布、広告料の受け取り、お礼状の送付、収支報告の作成と、仕事は絶えることを知らない。

また、一つの行事が終わればほとんどの部員はそれで全てが済んだと思い、気が晴れているのかもしれない。行事後に飲むお酒はきっと格別だろう。しかしマネージャーにとって気が休まる瞬間は訪れない。「その会合で誰かが酔い潰れるかもしれない。そのとき介抱するのは自分だ」、「会合に收拾を付け、最後にきちんと締めるのは自分だ」と思うと、みんなが羽目を外す中、「自分だけは理性を保たなければ」と、自分を律することなしにはいられなかつ

た。

そして、事後処理を含む全ての仕事が終われば、すぐに次の行事の準備について考え始めるのである。自分がマネージャーでいる限り、その繰り返しなのである。

年中行事だけを取って見ても目の回るような毎日だが、これ以外にも、部における日々の会計計算・報告、体育会への事務書類提出、学連との連絡、他大学との渉外活動、OBOGとの関わり、そして部員との対話と、すべきことは尽きない。

その中でも、自分が最も重要だと思う役目は、人との交流であった。誰にでも優しさや思いやりを持ち、丁寧に親切に接してきた。自分の最も近くにいる、部員の様子や調子には特に目を配った。部員とたくさん接したくて、練習が始まる前や終わった後、時には練習中も、他愛もないことを何でもいいから話し掛けた。試合前で神経質になっている部員がいれば話を聴き、悩みがあって暗くなっている部員がいれば笑顔でアドバイスをした。そのお陰か、先輩・同期・後輩に拘らず、何かあると自分に相談してくれた。相談してくれると、自分も「主務」として、自分という一人の人間として信頼されている気がしてとても嬉しくなった。また、部内の空気が沈まぬよう、練習中も大きな声を出した。たとえ自分は毎日仕事如山積みで、本当は暗い気持ちであろうとも、できる限り明るく振舞ってきたつもりである。それは、自分が笑顔でいることにより、周りの人が笑顔を返してくれるから。みんなが嬉しくなると、自分も嬉しくなれた。

ここまで書いて、「主務」の仕事はやって当たり前のことばかりである。誰に気付いてもらおうとも、誰に労ってもらおうとも、誰に評価してもらおうとも思っていない。しかしその分、それを分かってくれている人がいると、表現のしようも

ないくらい感激した。会合終了のメーリングリストを配信すると、高井先輩が自分に対する労いの言葉を一言書いてくださった。池田先輩が「貴方のお陰で(会合が)楽しかった」とメールをくださった。慶早戦のお知らせをするメーリングリストの送信が明け方になってしまうと、「遅い時間までお疲れ様。自分の為に集中してもいいのでは？」と落合先輩がメールを返してくださった。関場先生の下に書類へのご署名を頂きに行けば、「文句一つ言わず、裏で準備をしてくれる人がいることが大切なんだ」と、次に先生と面会するお客様がすぐ側に控えるお忙しい中、40分にも亘りお話してくださった。これは、部員みんなの前でも仰ってくださった。

この方々以外にも、「何でも手伝うから言ってね」と声を掛けてくれた部員や、「主将と主務はいつも大変だよな」と大変さを分かち合ってくれた部員、そして何より、マネージャーとしてのノウハウを手取り足取り教え、いつも自分に目を掛けてくれた先輩……。自分が「主務」業を行う上で精神的な支えとなった人はたくさんいる。

こうした、人との触れ合いを数多く、少なくとも他の部員よりも多くさせていただけたのも、ひとえにこの役職に就いていたからだと思う。自分に取り、かけがえのない貴重な経験をもって、自分を人間的に成長させてくれたこの役職に感謝したい。



4年間の振り返りと現在

平成 20 年卒 坂根 宏志

このたびは、伝統ある慶應義塾体育会バドミントン部の記念部誌に寄稿させていただくことになり、誠にありがとうございます。部活を引退してから早4年ほど経ちますが、現役時及び現在の状況等について寄稿させていただきます。

私が塾バドミントン部で得たことは、バドミントンの技術や規律を守るということはもちろんですが、最も得たと感じる事ができたことは人のつながりです。入部を決めたのも4年間部活をやり通せたのも部活を引退後も連絡を取り合っているのも、根本にあるのは人のつながりがあったからだと思っています。このつながりがなければ、部活を最後まで続けられなかったと思います。

一方で、入部当初は最後まで継続できるか不安でした。個人的に練習についていけるのかにも不安がありましたが、同期5人が入部して2桁の部員数になるという部員数の少なさには部が存続できるのか心配でした。そんな中、入部後すぐに春リーグ戦があり、3部から4部に降格するという結果になり、苦しい状況下で部活生活が始まったのを覚えています。

最初の1年は復唱等の仕事をきちんとこなせるようになることを念頭に置いて練習等を行っていました。やるべき事はしっかりやる等という基本的なことは、ここで身につけられたような気がします。

徐々に後輩が入部して部員も増加して部が活気づき、各代の先輩方が練習方法等に工夫を加え、リーグ戦3部復帰に向けて進んでいきましたが、4部の状態で私の代が最上級生となりました。私が1年生の時に4部に降格したた

め、私の代以外の部員は3部を経験していないことから、何としても3部に復帰したいと同期の手塚元主将をはじめ感じていました。最終的に3部昇格を達成できた時は、試合に出ていなくても、充実感を感じることができ、達成時の光景は鮮明に覚えています。

他にも中部遠征など様々な試合やイベント等がありました。特に合宿というのは共に寝泊りをして互いを知る良い機会であったと思います。部活動は試合に勝つために練習することはもちろんですが、他に得られることも多く、人間として大きく成長させてもらえたと感じています。今、現役時の自分を改善することを考えるなら、もっと発言して討論慣れしておけばよかったということです。

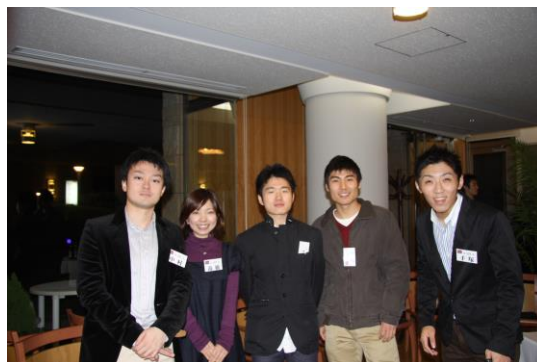
部活引退後は大学院に2年進み、現在では公務員という職種に就いています。民間企業でももちろんですが、物事を進めるうえで必ず必要となるのが根拠です。法律の施行に係ることであれば法律の条文等を根拠とするわけですが、現役の学生の皆さん、特に部の運営を行っている最上級生においては、しっかりと根拠をもって練習などを行ってほしいと思います。根拠をもって練習すれば必ず効果が出るという保証はありませんが、何が必要だからこの期間にこの練習をやるといった計画についてはしっかり作って後輩部員に説明し、理解してもらわないと認識の違いが生じます。この認識のずれは人間関係がうまくいかなくなる原因の1つとなります。また、後輩部員も先輩に対して自分の意見を話す際は、なぜそう思うのか根拠を持たないと、ただ自分の好き勝手に言っているという印象しか受けません。自分の意

見を話すことは良いことですが、納得してもらえ
るような根拠も併せて考えてください。

自分の思い通りにいかず、苦しい時こそ、根
拠に立ち返ることが重要だと思います。時とし
て、一人で考えても解決しないこともあります。
その時は遠慮なく同期等に相談し、別の意見
をもらうことも必要です。臨機応変に対応してく
ださい。

私は現在、月に数回バドミントンをしている
状況です。現役の学生と対等に打ち合いがで
きるレベルではないのですが、私なりにできる
ことは部に還元できればと考えております。今

後も伝統ある塾バドミントン部が、素晴らしい成
績の達成と人材の輩出ができることを心より願
っております。



現役時代の思い出、4年間を振り返って、卒業後の生活や近況

平成 20 年卒 高橋 明子

はじめに、慶應義塾体育会バドミントン部が
創立70周年を迎えます事を心よりお慶び申し
上げます。また、多くの偉大なる先輩方が築き
上げ、受け継いできたバドミントン部の70年の
歴史の1ページに名を刻み寄稿できます事を
光栄に思います。

私は2004年4月に体育会バドミントン部に
入部しました。入部したきっかけは、前年の秋
季リーグ戦の応援に行った時、圧倒的な強さ
で勝利する野村由貴子先輩との出会いでした。
今までに見たことのないフットワーク、速いスマ
ッシュ、エンドラインぎりぎりに落ちるクリア、回
転するヘアピン、野村先輩がコート上で繰り広
げる全ての動きに当時女子高生であった私は
一瞬で心が奪われ、「野村先輩のように強くな
りたい、リーグ戦に出場して勝ちたい」その一
心で入部を決めました。しかし、入部当初女子
部員は私1人でしたので、リーグ戦は同好会
の方々に協力して頂いてやっと出場できる状況、

男子との練習について行けず体調を崩すこと
もありました。2年生になると、心強い後輩、和
栗・藤原の2人が入部し、念願の女子部復活
を遂げることとなりました。

体育会バドミントン部の4年間の活動で学ん
だことは、一致団結の重要性です。私は女子
部最上級生として、部員が増える喜びと同時
に、部員各人の意識を高く維持するための環
境作りに悩みました。バドミントンは個人競技
ですが、リーグ戦や団体戦ではチームの結束
力が試合を大きく左右します。レギュラーメン
バーだけではなくチーム全員が同じ目標に向
かって一致団結すると、より大きな力を発揮す
ることができる、そのことを和栗や藤原と共に、
常に後輩たちに伝えてきたつもりです。3年の
秋季リーグ戦で4部に降格し、「3部復帰」とい
う目標を掲げて部員全員が一致団結したこと
で結束力が生まれ、結果につながったと自負
しております。

現役時代は慶應義塾の代表として試合に出場しているため、もちろん勝つことが求められました。私自身、負けず嫌いの性格であるため勝ちたいという気持ちは人一倍強く、惨敗すると号泣し落胆しました。リーグ戦でなかなか勝つことができず、チームに貢献できなくて自信喪失していた2年生の秋、当時の部長・関場武先生に激励のお言葉を頂いた事を今でもはっきり覚えています。「勝ち負けではない。勝つことができずにめげることはない。焦らず練習し努力すれば必ず報われる時が来る。」という先生のお言葉は、引退するまで心の支えでした。

もう一つの心の支えは「仲間」の存在でした。目標を掲げチームの先頭に立ち引っ張って下さった先輩方、入部してから引退する日までどんな時も支え合った同期、頼りない私に付いてきてくれた後輩たちは、大切な仲間であり宝物です。この仲間のおかげで4年間、頑張る事ができたと改めて思っています。

今、私は慶應義塾大学病院で小さな頃からの夢であった看護師として働いています。勤務中は腰を掛ける時間がほとんど無く、忙しい時は休憩を取る事ができません。患者さんからのナースコールがあれば急いで病室に向かい、時には悲しいお別れもあります。体力的にも精神的にも決して楽な仕事ではなく、自分で選んだ道とはいえ多忙な毎日が続くと挫けそうになります。そんな時は、体育会バドミントン部で過ごした4年間と、大好きな仲間たちを思い出します。楽しかったことや嬉しかったこと、辛かったことや悲しかったこと、4年間本当に多くの経験をしました。私には楽しい時間を過ごしたたくさんの仲間がいて、辛いことも乗り越えるこ



とが出来た、だからこれからどんな試練にぶつかってもまた乗り越えることができるという自信につながっています。体育会バドミントン部の4年間の経験はかけがえのないものであり、今の私の活力となっています。

このように多くの経験が出来たのも、現在の自分が存在するのも、体育会バドミントン部に関わる全ての方々のおかげです。現役時代に直接指導して下さい、試合会場にいらして叱咤激励して下さい先輩方、遠くから応援やご支援を下さった関係者の皆様、そして現役時代の仲間たちにこの場をお借りして心より感謝申し上げます。

今度は自分が現役部員の力になる番ですが、なかなか試合の応援や日吉に顔を出すことができず申し訳なく思っております。しかし、いつも体育会バドミントン部の事を思い現役部員を応援しています。現役部員の試合結果報告や部員日記リレー、五月女監督の総括、高井先輩の写真、関場先生の素敵なジョーク…いつも楽しみに拝見しています。現役部員のこれからの益々の活躍と部の発展を心よりお祈り申し上げます。

最後に、今回70周年部誌編集委員の皆様をはじめ、部誌の発行に御尽力頂きました関係者の皆様に厚く御礼申し上げます。



大学4年間を振り返って

平成 21 年卒 光井 翔

振り返りを書かかせていただくにあたり、大学を卒業してから早くも 3 年間に過ぎているという事実に驚きを隠せません。そんな今でも、大学 4 年間のあまりに濃かった時間はしっかりと頭に焼き付いています。

「3部昇格を目指し続けた4部での奮闘時代」、「念願の3部への昇格」、「3部優勝を目指した挑戦の時代」、幸運にもこの全てに当事者の一人として関わることができたのは、私の代だけではないでしょうか。思い返すと、この一つ一つの時代全てに、ドラマがあり、感動がありました。

「3部昇格を目指し続けた4部での奮闘時代」
努力しても努力してもなかなか結果につながらず、何度も悔しい思いをした印象が強く残っています。練習量の増加、練習方法の工夫、応援の方法など当時の自分たちなりに考え、チ

ームが勝つための道を必死で模索しました。まだまだ思いの至らない部分は多かったです。先輩方の取り組む姿勢を見習い、「チームで戦う」ことを強く意識するようになっていました。(加えて、毎晩のようにバドミントンのこと(?)を議論しあって先輩方と飲んだことが、最高の思い出となっています。)

「念願の3部への昇格」

全勝優勝しよう！という当時の主将の言葉に胸を打たれる思いがしました。4部で優勝するためではなく、3部で戦うための準備をするという1人1人の意識の変化がチームの変化につながった気がします。3部昇格をかけた入れ替え戦では、その場にいる全員で戦っているというものすごい一体感とそれが自分の力になっているという不思議な感覚を感じていました。「チームで戦っている実感」と「目標を達成した

ときに初めて得られる喜び」を経験することの出来た1年間でした。(加えて、毎晩のようにバドミントンのこと(?)を議論しあって先輩方と飲んだことが、最高の思い出となっています。)

「3部でさらに上を目指した挑戦の時代」
最上級生となり、組織をまとめ、動かすことの難しさを実感し続けました。私自身が部で学ぶことのできた「チームで戦うことの充実感」「大きな目標を達成することの喜び」を後輩にも経験してほしいと思い、「本気」というスローガンの下、3部優勝という大きな目標を立て、あえて挑み続けました。どこまで思いを伝えることができたかは定かではありませんが、その中で、チームを動かすとは、チーム員1人1人に思いを伝えることであり、コミュニケーションをとって思いを共有していくことの重要性を学ぶことができ、これは社会に出た今も役立っていると感じます。

自分の「チームをまとめる」という初めての経

験と向上心・「皆を本気にし、3部優勝」という目標に挑戦し続けたまさに挑戦の1年でありました。(加えて、毎晩のようにバドミントンのこと(?)を議論しあって同期、後輩と飲んだことが、最高の思い出となっています。)

4年間という限られた時間の中で、いろいろなことを経験し学ぶことが出来たこと、そのなかでかけがえのない仲間と巡り合えたことに感謝し、バドミントン部の一員となれてよかったなど、改めて振り返ります。

以上



社会人になって感じる、バドミントン部で続けて来て良かったこと

平成 21 年卒 山口 悦伺

まず、この 70 周年記念部誌に対して文章を記載させていただくにあたり、誰にどのような目的で文章を書くのかということ考えた。自分の現役時代の振り返りとしての文章は、卒業前の'08 年活動報告のレポートに書かせていただいたので、悩んだ末に今回は現役部員の皆様に向けて、「社会人になった今だから感じる、バドミントン部で続けて来て良かったこと」というテーマで書くことにする。この場を借りて現役に伝えたい想いはたくさんあるが、卒業後3年超も部から離れたOBという立場を踏まえて、

「先輩達は『バドミントン部での経験が社会人になって生きる』と良く言うけれど、具体的にどんな経験なんだろう」ということについて、現在私なりに特に感じていることを書く次第である。

まず、「バドミントン」「部(組織)」「自分自身」について、4年間「本気で考えた」ことが、役にたっていると思う。ここで言う「本気で考える」ということは、自分の意見に固執して深く掘り下げることではない。自分の考えていることが本当に正しいのか、一人よがりになっていないのか、人の心を動かすことができるのか、疑うこと

だ。思い返すと1年生の時「この練習よりあの練習が良い。なぜなら自分はこう思うから。」と、よく考えていたが、それは自分の高校時代の体験に基づいた非常に思い上がった考えであり、当時の最上級生の考えや思いに対して思慮の欠けていたと思う。その傲慢を五月女監督や先輩方に注意していただいたことを本当に感謝している。社会人になって感じることで、「周囲は自分を注意してくれない」ということがある。わざわざ労力をかけて他人を注意する人は少ない。だからこそ、自分で自分を律して見つめなおす心がないと、歪んでいってしまうと思う。私も未熟ながらこのようなことを書くのも恥ずかしいが、自律して考える基礎をバドミントン部で教えていただいたと感じている。

次に、「言い訳しないこと」「黙って努力すること」「背中で魅せること」の必要性に気付いたことが役にたっていると思う。これは主に同期の光井や前田、そして偉大な先輩方から学んだことである。そして恥ずかしながら現役中は全くできなかった点である。例えば私は「今日は足が痛くて・・・」とか、「昨日寝不足だったんだよね・・・」等、言い訳が絶えなかった。しかし、最終学年になって、特に主将の光井がどんなにひどい怪我をしていても、それを周囲に伝えずにチームを引っ張っていく姿が頼もしく羨ましく感じ、社会人になってからは何があっても言い訳をしないように努めている。そして、まだまだではあるが、次回以降同じ失敗を繰り返さないように「黙って努力して」「背中で魅せられるように」しているつもりである。その方が何より「カッコいい」ということを現役中に感じられたのだと思う。

最後に、役立つということとは少し違うが、「かけがえのない仲間」を得たことである。自分

は本当に仲間に恵まれた。世代を超えた交流が今でも継続しており、卒業3年は経過したが、先輩方や後輩も含めた同期と年に数回集まる機会がある。光井と前田とは何かの理由につけ年に10回は会っているし、特に用事もないのに電話をする仲である。それぞれ別の人生を歩んでいるが、何かあれば助けあうし相談できる、そんな仲間を得られたことが何よりも貴重なバドミントン部での経験であったと思う。

上記のとおり、筆の進むままに書いたので認識違い等、目につく点多々あるのではないかと思うが、私の純粋な想いとしては、現役部員にこの部で大いに悩み、自分を成長させて、素敵な仲間を得てほしいということに尽きる。良い4年間にしてください。



現役時代を振り返って

平成 21 年卒 前田賢志

体育会バドミントンを卒業してから早くも3年が過ぎようとしている。私が4年生時に1年生であったメンバーも最上級生、そして卒業を迎えることになり、少し寂しさと同時に時がたつのは早いものだなと感じている。自分たちが関わった時代が終わり、新しい時代がやってくるとも言おうか。がむしゃらにチームの目標に向かって頑張っている後輩たちを見て、自分たちが現役だった頃を懐かしく思うことが多くなった。

今思うと、現役時は苦しかったことももちろんあるが、楽しかったことの方がはるかに多い。ほぼ毎日バドミントンの練習に明け暮れ、少し授業に行き、夜は先輩、同期、後輩たちと飲むという単純なサイクルで大学生活は成り立っていた。普通の大学生活では考えられないほどの長い時間を先輩、同期、後輩たちと共有し、1~3年春時は3部昇格、3年秋~卒業までは3部上位あるいは2部昇格という目標に向かって本気で取り組んでいた。その結果、3部昇格という場に立ち会えたこと、自身のこととして、3部リーグで勝利を挙げられたことは本当に素晴らしい経験をさせてもらったと思っている。言葉で表すのは難しいが、リーグ戦や早慶戦に対して、チームがまとまり、徐々に熱いものがこみ上げてくるあの高揚感は社会人となった今、なかなか味わうことができない貴重な体験となっている。

この部に在籍し、得たものは数多くあるが、一番成長したのは考え方もかもしれない。「試合とは自分が積み上げてきたものを表す作品である」、「1/100の積み上げで早稲田を倒す」等々。五月女監督をはじめとする多くの先輩

方から、多くの新しい物事の捉え方、考え方を教えていただいた。果たして自らが考えに至るとしたら一体何十年かかることやらと思ってしまう(笑)。こうした考え方の積み上げたものが表れたのが、今思うと4年生の最後のリーグ戦だったように思う。私自身、これまでメンバーチェンジでの出場経験はあるがスターティングメンバーとしてリーグ戦に臨んだことはない、後輩との実力も伯仲である、自分が出場したとしても次代にはつながらないといった状況下にあった。個人としてはリーグ戦に出場したいものの、チームのことを思えば、実力が伯仲であるならば、後輩を出場させたいといったところだろうか。当初はとても複雑な気持ちであったが、夏季の練習が進むにつれ、なぜかはわからないが自然と「後輩達の壁になる」、「リーグに出



たかったら俺を倒してみろ」という考えに変わっていた。こうした考え・姿勢が自身も奮い立たせたのか最後のリーグ戦で5試合シングルス出場の機会をもらうことができた。結果を見れば1勝4敗であったが、この1勝は自身にとってかけがえのない1勝である。応援にも背中を押してもらい、自分の体が自分の体ではないような感覚であり、4年間積み重ねたことが自然と試合で出せた、そんな不思議なそしてバドミントンをやってきて一番の試合であった。考え方で結果は変わるんだ！という体験をした瞬間でもあった。

こうした体験から得たことというのは社会人になった今にも活きている。私は今、24時間365日安定した通信網の運用に努める部署に所

属しているが、昨年には、東日本大震災や和歌山、奈良等で猛威をふるった台風12号、台風15号で多くのお客様に多くのエリアでサービスが提供できない状態に陥る等、多くの難しい対応を迫られる場面に直面したりもした。そうした状況下では何を考えて行動していかなければならないのか、考え方を積み上げているところである。

慶應義塾体育会バドミントン部は、多くの学ぶ機会を与えてもらい、成長の場を与えてくれるところであった。これからはいちOBとして、受けた恩恵を少しでもバドミントン部に還元できるように、練習に、イベントに参加したいと考えている。

4年間の思い出

平成21年卒 藤原 めぐみ

卒業してから3年。慶應義塾体育会バドミントン部で過ごした日々を今でも鮮明に覚えている。

私が入部した2005年、当時は部員数が今より少なく、女子部員はリーグ出場ぎりぎりの人数だった。そんな状況だったことから、1年の春リーグから4年の秋まで単複で出場させていただいた。

私は大学でバドミントンを続けようと思っていたわけではなかったので、入部をとっても迷っていたが、初めてリーグ戦に出場して純粋に“バドミントンが楽しい”“またやりたい”という感情を抱き、入部を決めた。そんなきっかけともなったリーグ戦はやはり特別な試合だった。毎年春・秋の年に2回、単複で一回10試合とすると4年間で80試合(入れ替え戦を入れると実際

はもっとだが)、大学で行なった試合のほとんどはリーグ戦が占めていたことになる。

しかし、それ以上に年1回行われる慶早戦は自分にとって大きかった。まず、その試合にかかる先輩方の想いや試合前の部の雰囲気、選考試合など日に日に緊張感が高まっていく。入部してから様々な機会でお会いする機会があり、私はその度に慶應の歴史や部の伝統を重んじる雰囲気を肌で感じていたが、慶早戦でより一層強く感じられた。そんな緊張感の中、試合が始まったが結果は実にあっけないものだった。そして、慶早戦を終えると最上級生である4年生が引退する。また、一年新たな歴史が刻まれていく。

それから2年後、私が3年生の時、慶早戦を終えると自分が最上級生となる一年が始まっ

た。同期の主将光井は“本気”をテーマとして掲げた。そして、光井主将のもと新しいチームとしてスタートしたが、部を運営する立場とはこんなに大変なものかと自分が最上級生になって初めてわかった。同期とは数え切れないくらいミーティングを繰り返し、練習に対してもチームについても本気で考え、がむしゃらに一年間取り組めたと思う。だからこそ最後の慶早戦はやはり特別なものだった。私は大学に入ってから最後まで実績を出すことができなかったため、とにかく勝ちたいという強い想いを持って臨んだ。しかし、結果は女子0-5で完敗。中には惜しい試合もあったが、自分の単複2試合に関しては、惜しいとは到底言えない試

合内容だった。ただ、一つ確実に言えることは、“自分の持っているショット、戦略、力を全て出し尽くした”ということ。試合直後はやはり悔しい気持ちが強かったが、自分の持っている力を出し切って負けた、それに悔いはないと思った。

最後の一年間は大変だったが、同期の存在が刺激になっていたと思う。支えながらもお互いに刺激しあえる中だった。卒業した今でも大切な仲間である。リーグ戦や試合の度に感じていたことが、慶應のOB・OGの数が他大学より圧倒的に多いということ。この、縦・横のつながりがいつまでも続いて欲しいと願うと同時にその一員となれたことを大変嬉しく思う。



4年間部活動を続けて

平成 21 年卒 和栗 恵

体育会バドミントン部に入部をすることになったのは、確か高校3年生の時、本出さんと高橋明子さんに誘っていただいた時のことだったと記憶しています。当時は、体育会には入らないつもりで、春季リーグ戦の出場だけを約束して練習に参加しました。最終的には、散々な戦績で終わった悔しさや、バドミントンが好きだという気持ちから入部を決めました。試合まで連れて行けば、和栗なら入部するだろうと思われていたようですが、まさにその通りでした。

入部を決めた後にやってきたのは、「1年後には3部で勝てるようにならなければならない」というプレッシャーでした。かといって方法も分からず、具体的な目標が定まらないまま練習をしていくうちに、自分がこのチームで勝たなければいけない理由、このまま部活を続けていくことの意味を見出せず、なかなか練習に身が入りませんでした。そして2年の秋には「4部降格」となりました。今から考えると、なんて勿体ない時間を過ごしてしまったのかと思います。ただ、私にとって、「3部で勝てる選手になる」よりも「4部のエースに勝つ」ほうがより具体的で、姿の見える目標となり、たどり着くまでの階段が見えたような気がしました。そして降格から1年、3年生の秋のリーグ戦で3部復帰を果たすことができました。

3部復帰を果たし、気づいたことがありました。結局は「気の持ち様」だということです。入部したばかりのとき、「3部で勝て」「早稲田に勝て」なんて、なんて無理難題を吹っ掛けてくるのだ

ろうと思いました。しかし無理難題だと思うから無理なのであって、それまでの道筋を立ててみれば決して無理ではないのだと思います。道筋を立てる努力を怠ってきただけなのだ。周囲には、助言を下さる先輩や、手伝って、支えてくれる同期や後輩がたくさんいる。恵まれた環境にあったにも関わらず、内に閉じこもり、自分に課すべき課題に正面から向き合っていかなかったのだと気付きました。

それからの1年間は、本当に充実した時間を過ごすことができました。思い起こせばきりがありません。最後の試合となる早慶戦では、早稲田の選手を相手にほとんど歯が立ちませんでしたが、何とかやりきったという思いと、これまで支えて下さった先輩方や家族、同期を始めとした仲間たちへの感謝の気持ちでいっぱいになりました。4年間をバドミントン部で過ごし、このような気持ちになれたこと、貴重な経験をさせていただいたこと、本当にありがたく思います。

今年で社会人となって4年目になります。学生時代にお世話になったお返しをするとともに、現役部員がより充実した学生生活を過ごせるように、微力ではありますが尽くしていきたいと思っております。そして、今までこうして続けてきたであろうバドミントン部70年の歴史の一部に加わることができて、光栄に思います。これからも、バドミントン部が益々活躍、発展することを祈り、70年記念部誌の寄稿とさせていただきます。



鹿島の合宿にて 同期と

四年間の体育会生活を振り返って

平成 22 年卒 渋谷 康太

有難いことにこうして自分の4年間を振り返る機会をいただきましたが本当にたくさんの思い出が蘇ってくるものです。挙げれば切りがありませんがいくつかこの場を借りてお話させていただきたいと思います。

・バドミントン部への入部を決意

1年間の浪人生活を経て晴れて慶應義塾の門を叩くこととなった私は、どんな華やかなキャンパスライフを送ってやろうかと胸躍らせていたのも束の間、ひょんなことからバドミントン部を見学することとなりました。当初は誰が好き好んでこんなむさ苦しい男達に囲まれてバドミントンをしなくてはならんのだと正直なところ思っておりましたが、あることをきっかけに入部を決意するに至りました。それは何と言ってもリーグ観戦です。先輩たちの一勝一球にかける思いがびしびし伝わってくるのを肌で感じ、いつの間にか自分もあのコートに立ちたい、自分

が試合に出て慶應を勝たせてやりたい、そう思わされていました。

・慶應 3 部リーグ昇格

H20 卒手塚元主将の頃にリーグ戦 3 部昇格を果たしました。これは私の体育会生活の中でも外せない出来事で、今でも尊敬する手塚先輩のリーダーシップのもと濃密な1年間を過ごさせてもらいました。この時はまさにチームが一丸となっていました。上級生が本気で目標を達成したいという思いがチーム全体に伝播していたように思います。この1年で組織が持つパワーというものを学びました。

・主将としての1年

本当に濃密な1年間でした。目標を達成するまでの道筋を考えチームの皆に示すこと、組織のベクトルを1つに合わせること、自分たちが立てた目標に本気で向き合うこと、仲間を信

じ頼ること、自分自身が強くなること、難しいことばかりでした。ただはっきりしているのはこれから歩いていく人生において必要になってくる考え方が最後の主将としての1年間に凝縮されていたということです。貴重な経験をさせていただいたことを今でも大変感謝しております。

つらつら取り留めもなく思い出を綴ってまいりましたが、元来体育会というものは結果を残すことが何より大切なことであると思っています。私自身、その点において貢献できなかったことが今でも大変心苦しく、それだけに身勝手なのは承知ですが現役諸君、未来の後輩たちの活躍を願ってやみません。名古屋の地から応援しております。頑張れ慶應！



平成 22 年卒 福崎 淳一

慶應義塾体育会バドミントン部創部 70 周年おめでとうございます。私自身の体育会バドミントン部での 4 年間で振り返ってみて、現役当時の一番の思い出は 4 年生(2009 年時)の秋リーグから早慶戦にかけての期間です。秋リーグ、慶應は 5 位でのスタートとなり、結果として 6 位に終わりました。迎えた入れ替え戦では、2-3 で埼玉大学に敗退し、4 部降格という結果でした。そのときのチームの志気は完全に下がり切っていました。しかし、この状態から 1 カ月後の早慶戦までは、少なくとも次の代からは前を向いて進めるようにと、4 年生を中心とした皆がそれぞれの気持ちをがむしゃらに行動に移した期間であったと思います。

チームの練習としては、リーグ戦に降格した

からといって今までやってきたことを変えるのではなく、ラリーをして勝てるようにする練習を続けました。クリアーで追い込まれても押し返す力、相手の鋭い球に対して体勢が崩れてもしっかりと球を返す力をつけるための練習を行いました。それに加え、4 年生たちはチームをなんとかするために各々が行動していました。私は早慶戦までの 1 カ月で理工階段(日吉から矢上に向かうところにある階段)を 100 本走ることを決めました。当時、主将の渋谷は周りの人間や後輩たちの気持ちを盛り上げるきっかけになるかと思い、坊主にする断髪式を開こうとしていました。同期の石岡も記念館の 2 階の観覧席にある階段(通称:ジャンスタ)を 100 周するなど、他の 4 年生の同期全員が暗い空気

を払拭し、次の早慶戦、さらにその次の代へと気持ちを上昇させるために、チームを動かそうと必死であったと思います。ただ、私自身もそうであったように、これらのことをやることでチームが前向きになることや、次に繋がるきっかけになるかどうかというのはわかっていなかったと思います。しかし、何か自分たちが信念をもって動かなければ現状は変わらないのではないかという気持ちがあったのだと思います。

私は、後輩たちを巻き込むことで、チームの志気を上げるきっかけになればと思い、練習後に後輩たちに声をかけ、一緒に理工階段を走ろうとしました。初めは先輩に言われたために、誘われた後輩たちは渋々一緒にやっている状況でした。しかし、後輩たちも私たちの気持ちを感じてくれたのか、徐々に能動的な態度へと変わってきました。早慶戦2週間前ぐらいになると、自ら走る後輩もでてきて、私が誘われる日もあるくらいになりました。さらに、4年生と同じくらい危機感をもって部活に取り組んでいた後輩たちもいました。これらの過程で、



現役当時の写真

早慶戦前のチームの練習では降格したときの悪い雰囲気はなくなっており、早稲田にくらいついて一泡吹かせてやろうという気持ちを持った選手が多かったように感じています。

早慶戦の結果は、男子は2勝13敗、女子は1勝4敗でした。例年に比べれば早稲田から多くポイントを取った年ではありましたが、早稲田との差を縮める数字ではなかったと思います。しかし、数字には表れていないものの、選手たちの1ラリー1ラリーをみたときに感じた気持ちの入ったプレーや、試合に出られない部員からは、悔しさを押し殺した上で選手を盛り上げようとする声援や姿勢など、1ヶ月前のチームとは違ったチームであったと思います。正直なところ自分自身の試合の記憶はあまり残っていないのですが、ベンチや戦っている選手をみたときに、このチームでやってきて良かったと感じたことは覚えています。そして、早慶戦が終わった後には五月女監督からも良い試合が多かったという言葉頂きました。ただ、同時に「ある1日が良くて良いチームだとは言えない」という言葉も頂きました。私は、早慶戦の内容はそれまでの1ヶ月があったからこそ実現できたものだと思っています。早慶戦までのパワーを、私を含めた全員がもっと前から出すことができているならば、リーグ戦での結果も変わったかもしれません。それができなかったか



現役の試合観戦に行った際の写真

ら降格という結果になったのですが、やればできる力があることを感じられたのは大きな経験や糧になったと思います。これからの生活ではその経験から感じたことは吸収し、できなかったことは改善していかなければなりません。そして、この経験は後輩たちに伝えていきたいと思えます。

現在は、体育会バドミントン部を卒業して大学院で研究生生活を送っています。そこでは、どう考えてもわからない問題にぶつかって、どうしようももうまくいかないことが多々あります。そんな状況でも、もがいて、あがいていけばふと解決策が思いつき、うまくいくこともあつたりします。こんなとき私は、現役当時の経験があつた

からこそ、このように問題にぶつかっても解決策を模索することができているのではないかと感じています。

私にとって体育会バドミントン部はバドミントンだけでなく対人関係や部の運営など色々な面で切磋琢磨できる場所であると同時に、失敗し苦しむことを体験できる部でした。その体験があつたからこそ嬉しかった思い出があります。これから社会にでるともっと大きな問題にぶつかることもあると思いますが、この経験は絶対に生きてくると信じて行動していきたいです。そして、これからも慶應義塾の発展とバドミントン部の発展をお祈りするとともに、微力ながら支えていきます。

平成 22 年卒 中 畠 優

私は高校からバドミントンを始め、三年間打ち込んでおりました。結果としては悔いが残ることなく全部出し切ったとも思えましたし、成績としても満足のいくものでございました。そして何より部活が本当に楽しかったためバドミントンが心から好きになっておりました。しかしそれと同時にこのチーム以外ではやろうとも思っていなかったため卒業をしてからは、バドミントンを大学でやりたい事の選択肢には入れておりませんでした。しかし高校時代の監督と慶應体育会バドミントン部の茂木コーチが早慶の同期という繋がりから、春合宿に参加させて頂いた事がございました。これが初めての参加であり、感想は予想以上にやりたいプレーが出来ず、体力が厳しいということもありましたが、その反面皆が本気で練習に取り組む姿勢、仲の良いチームメンバー、社会人のOB・OGの方々とつながりの深さにとても魅力を感じたことを

覚えております。そして久しぶりにバドミントンをした楽しみも強く感じました。

入学をしてからはサークル等も少し見て回りましたが、合宿の印象がとても強かった事とバドミントンが好きな気持ちが強かったため入部を決めさせて頂きました。最初の頃は正直に申しまして練習の頻度が多いと感じ、大学生活これでいいのかと悩んだ時期もありました。しかし日々の練習・合宿、リーグ戦・早慶戦で本気でプレイする選手・本気で応援するチームメイト・支援して下さるOB・OGの方々を見ていくうちにそのようなつまらない考えは気付かないうちに消えており、レギュラーになりたい・試合で勝ちたいという考えに変わっておりました。

そのような数多くの経験の中、私が特に印象に残っているのは二年生の時の三部昇格戦・三年生の時の秋季リーグ戦・四年生の時の四

部降格戦・早慶戦です。一つ目の三部昇格戦では全員が同じ方向を向き、これ以上ないチームワークを感じ、完璧だと思われるリーグ戦であり、心底すごいチームだと感じました。二つ目の秋季リーグ戦は、私が初めてスタメンとして出場した試合であり、プレッシャーは感じましたがバドミントンを、そして団体戦を一番楽しめたリーグ戦でした。三つ目の四部降格戦は私達が最上級生の時の最後のリーグ戦であり、私は勝たなければいけなかったダブルスで負け四部に降格してしまいました。この瞬間が大学四年間で一番悔しい思い出です。四つ目の最後の早慶戦は、唯一早慶戦で勝利を挙げる事が出来た試合でした。同期・後輩、たくさんのOB・OGの方々から祝福の言葉を頂く事ができた時の嬉しい気持ちは一生忘れないと思います。

最後になりますが、今回の機会です。四年間を思い出してみたら、悩んだ事も楽しかった事も迷惑をかけてしまった事も書ききれない程たくさんありました。私は心からこの部に入部して良かったと感じておりますし、もう一度部活を

やりたいとも感じております。このような気持ちになれたのも常日頃から皆様が支えて下さったおかげだと感じております。本当にありがとうございました。



4年間の感謝を込めて

平成 22 年卒 森本 修介

私が入部した年は一気に新入部員が増え、活気が出てきた年でした。私は入学前の春合宿に参加させてもらい、先輩方の練習に必死についていったのを今でも覚えています。先輩部員が少なかったこともあり、一人ひとりの先輩方の存在感は大きく、当時の 4 年生、広田主将、小池先輩、小粥先輩をはじめ、全ての先輩方にお世話になりました。2 年時には大勢の OBOG の声援を受けて、3 部昇格を果た

すことができたことは今でも良い思い出です。リーグ戦や早慶戦には祖父母に近い年齢の先輩方も応援に駆けつけて下さり、改めて伝統ある素晴らしい部に入部したと嬉しく思ったものです。

私がバドミントン部に入部した理由は二つ。「バドミントンが好きだから」、そして「このままでは終われない、自分はまだまだ上手くなれる」という思いがありました。中学から始めたバドミ



ントンですが、高校まで努力してもジュニアに追いつくことはありませんでした。大学では「リーグ戦に出て高校時代に勝つことができなかったジュニアに勝つ」という目標を持って練習に励みました。そして大学 2 年のリーグ戦でインターハイ出場選手に勝った時、ようやくその目標が叶ったのです。小泉信三先生の「練習ハ不可能ヲ可能ニス」を実感できた瞬間でもありました。

一方、怪我や病気で辛い時もありました。学業との両立を迫るあまり常に時間に追われ余裕が無く、気合で乗り切ろうと思っても体は正直でした。特に、名古屋、北海道、仙台での大会など遠征では怪我と病気に泣かされ満足の行く結果を残すことができませんでした。辛い遠征でしたが、仲間と寝食を共にするのは楽しいものでした。名古屋では坂根先輩のご実家に泊めて頂き、また、熱海の慰労会では徳用先輩の法悦旅館にお世話になりました。

バドミントン部と学業だけでも大変でしたが、大学 2 年の夏、私のもう一つの目標である交換留学を実現する為に五月女監督と手塚主将に申し出ました。練習と学業に加え、留学試験の準備が加わり多忙を極めました。人は明確な目標を持つと、自分の思っている以上に頑張れるものなのかも知れません。翌年(3年の夏)、念願が叶ってカリフォルニア大学アーバイン校への交換留学を実現しました。この時、光井主将をはじめ、皆が温かく送り出して下さったことは今でも忘れません。また 4 年の夏に帰国した時も、同期や後輩達に温かく迎え入れてもらいました。最後の早慶戦では気合いを入れて臨み、ダブルスでは同期の中畠と組んで、単複ともに勝利を収めることができました。

本当に充実した 4 年間でした。辛い時もありましたが、やめなくて良かった！留学先のカリフォルニア大学やパデュー大学でもバドミントンを通してすぐに沢山の仲間ができました。バドミントンのお陰で学業や留学生活も一層充実したものとなったのです。

大学院生となってからの 2 年間はコーチとして部に関わることができました。コーチとして記念館に足を運ぶと、現役の頃とはまた違った感覚になりました。私も沢山の方々の指導やアドバイスで頑張ることができたのだと思うと、自然と先輩方への感謝の気持ちが強くなり、後輩の指導にも力が入りました。

4 月にはよいよ社会人となりますが、これからもバドミントンを通じて多くの人との出会いを大切にしたいと考えています。そして慶應体育会バドミントン部の OB としての誇りを持ち、社会に貢献できるよう頑張りたいと思っています。できるだけリーグ戦や早慶戦の応援に駆けつけ、先輩や仲間、部員の皆さんにお会い

できるのを楽しみにしています。最後に、これまでにご指導下さった多くの先輩方、また、ど

んな時も支え続けてくれた両親に心から感謝します。



平成 22 年卒 石岡 陽平

慶應義塾体育会バドミントン部での4年間を振り返り、この部で良かったと思えた点について3つ記そうと思う。

1つ目は、強くなるための練習環境が整っていることである。毎日使用可能な日吉記念館、ランニングには最適な川沿い、ダッシュに適している理工階段、充実したトレーニングルーム。コートの手配に困り、様々なスポーツセンターを転々としなければならない大学とは異なり、素晴らしい環境・設備の中、バドミントンに集中することができた。

2つ目は、OB・OGの方々の支援が素晴らしいということである。現役同士でバドミントンをするのは当然。現役の中でお金を出し合うのは当然。しかし、慶應の体育会はバドミントン部に限らずOB・OGの方々の支援が手厚い。お金の援助もあるが、練習面でのサポート体制もしっかりしている。OB・OGがシャトル拾い



の手伝いをしている部活はこの部以外にないと思う。OB が現役のために出来る限り時間を割き、記念館に足を運び、シャトル拾いをしている。それだけ現役に勝って欲しい、一つでも上に行って欲しいと願っているのだ。このように現役のみならず、OB・OGの方々まで一体となっている部活はあまりないと思うし、そのような部に所属していたことが幸せであったのだと感じている。

3つ目は、一生仲良くするであろう仲間と出会えたことである。高校時代にインターハイに出場した人、県大会で活躍していた人、そして私のように全くの無名の人まで様々な選手がいた。そのような環境の中で、日々バドミントンについて語り、練習について話し合い、コート内では切磋琢磨し競い合った。真剣に考えているからこそ、時にはぶつかり合うこともあった

が、良好な関係を築くことができたと思う。また、特にこの部の特徴として良いところであり、少し悪いところでもあるが先輩・後輩関係なく、仲が良いことだ。上下関係はあるものの、練習が終われば一緒に食事をしたり、飲みに行ったりした。バドミントンの話だけではなく、最近の悩みや恋愛事情など…。バドミントンの練習は厳しいながらも楽しかったが、練習後の食事の方が非常に楽しかった。また明日頑張ろうという気持ちにもなることができたし、親交も深めることができた。学生時代が終わり、社会人になり振り返った時に、このまま老後になっても付き合う友人は何人ぐらいいるのであろうと考えたが、数人だと思う。その中の大半が体育会バドミントン部で出会った人である。今後は今以上に会えなくなると思うが、自分の財産なので大切にしていきたいと思う。

バドミントン部員としての4年間

平成22年卒 中津 哲彦

大学に入ったものの特にやりたいこともなく、ふらふらしていたが、どうせなら少しでも経験のあるバドミントンを真面目にやってみるのもいいかもしれないと思い、バドミントン部の練習を見学しにいった。4月の末頃だったかと記憶しているが、特に事前の連絡もなく、いきなり訪問した私を温かく迎えてくれた先輩方の姿が印象に残っている。自分がまだどうするのか迷っているという話をすると、リーグ戦を見に来るようにと誘ってくれた。リーグ戦はバドミントン部にとって大きな目標の1つであり、そこに向かって真剣に取り組んでいる姿に共感できるなら入ってみる価値はあるといわれた。リーグ戦当日、見学に行ってみると、チーム一丸となって

戦う姿を見ることができた。出ている選手はもちろんのこと、ベンチメンバー・ギャラリーも含めて、慶應バドミントン部全体が一体となり戦っている姿を見ることができた。バドミントンを部活動としてやったことはなかった私にとってこのような環境はとても新鮮なものであり、とても魅力的に見えたことを覚えている。

入部当初は、練習についていけず、ただつらいばかりで自分の成長を実感する機会もあまりなかった。技術的にも体力的にも同期と比べて劣っており、同期に差をつけられるばかりだという思いもあった。そんな中、私がバドミントン部員として果たした役割の中で大きなものは、マネージャーだったかもしれない。2年生

の夏頃、当時マネージャーだった吉永先輩から声をかけられ、マネージャー候補に挙がっているという話を聞いた。当時、プレーヤーとして活躍する機会もなく、部員としてチームに貢献できているという実感を持っていなかった私は、自分が貢献する道が与えられたことをうれしく思い、引き受けることにした。

早慶戦に向けてパンフレットの作成や広告回収などを行い、それまで自分が経験していなかったことが経験できたと同時に、自分がしたことによってチームに影響を与えることができている実感を得ることもできた。今から振り返ってみれば、周囲の人に迷惑ばかりかけていたかもしれないが、自分がチームの一員として確かに役割を果たすことができているという感覚はとても大事なものだったように思う。

プレーヤーとしてのもっとも強く印象に残っている思い出は、最後の早慶戦である。後にも先にもあれほど緊張し、あれほど楽しむことのできた試合はなかった。当時、マネージャーとして部に貢献することはできていたものの、やはりバドミントン部員である以上、バドミントンで結果を残したかった。それまでの3年間早慶戦に出場したことがなかったが、4年間の集大成を発揮する場として早慶戦に出たいと思っていた。当時、非レギュラーメンバーの中から1人だけ出られることになっていたが、そのイスを中津・中村(卓)・野村・三澤の4人で争うこととなった。実力的には誰が勝ってもおかしくない状況であったが、無事出場権を獲得することができた。

迎えた早慶戦、シングルスは1学年下の西本君との試合だった。一般入部であったため、ここでポイントがとれば大きいというOBの方々の期待も感じていた。序盤は、シーソーゲームが続いていた。確かにラリーのテンポは部



内の試合よりも早く、全く余裕のない状態だった。しかし、ところどころ隙はあった。自分の思うようなラリーができることもあり、もしかしたら勝てるかもしれないも思った。結果は惜敗。1ゲーム途中で連続でポイントを落とし、そこから立て直すことができなかった。期待を感じていた分ふがいない結果に情けない気持ちになった。その後のダブルスの試合も、惨敗。4年間の成果もこんなものかという考えも頭をよぎったが、先輩方は温かい言葉をかけてくださった。「入部当初クリアーもまともに飛ばなかった中津が早稲田と対等にラリーしていてびっくりした。」

今から振り返ってみると、もっとできたのではないかとの思いもある一方4年間1つのことに打ち込み成長を実感できたことは大きな自信につながった。現在、社会人を2年弱経験したが、幸か不幸かバドミントン部の練習よりきつい思いは一度もしていない。これからの人生の

中で大きな困難が待っているかもしれないが、それを乗り越えていく礎は、大学4年間で身に

つけることができたと思う。

現役生活の思い出

平成22年卒 本田聖子

私は大学4年間、もつといえは体育会部員として過ごした4年間、周りの体育会出身者と若干異なる経験をしています。そして大袈裟なようだけどこれまでのなかで、一番悩んで苦しんで、考えて気付いて、努力して成長した年月だったと思います。

私の現役時代の経緯を簡単に紹介しますと、私は女子高から運動不足を補うようにバドミントンを始め、看護医療学部の学業との両立を不安に思い、マネージャーを希望し体育会の門をくぐりました。でも練習に参加してみると、ハイレベルな選手に教えてもらうバドミントンのプレーは本当に刺激的で楽しく、体力のない私には苦しい練習でも、講義のあと湘南台から記念館に向かう足はいつも弾んでいました。結局選手としての入部を決めたのですが、入部1か月半という間もない頃にアキレス腱を断裂し、長期のリハビリ期間を過ごしました。リハビリを乗り越え約1年半、選手として練習や試合に出場することが出来ましたが、その後練習中に再度足を痛め、学業のほうも過密で重要な時期に入っていた為、沢山悩んだ末に選手を続けることを断念し、トレーナーとして引退までの残りの約1年半を過ごしました。選手として練習・試合に臨んだ思い出、リーグ戦・早慶戦で沢山の汗と涙を流した思い出、仲間と過ごした合宿や遠征の思い出、また最上級生の時にはチームの運営で苦労した思い出など、語りだしたら本当にきりがないので、ここには特



に私にとって印象深い、トレーナーへの転身後のことを書こうと思います。

怪我が原因でプレーを退いたのは、大学2年の2月でした。元々身体に関することには興味があったので、周りより僅かにだけ知識はあったものの、体育会部員が抱える身体の問題や必要とするコンディショニングは本当に奥深く、始めは目の前の部員の身体に何が起きているのか、どう対応するのが適切か、ほとんど理解することが出来ませんでした。更に、これまでノンプレーヤーとして部に関わる前例がなかったので、部活動中にどう過ごせばいいのか、何をして過ごすべきなのかも分かりませんでした。なので、少しでもトレーナーとしての知識をつけて発信が出来るように、記念館のベンチで本を読んだり、時にベンチをテーブル代わりに練習フロアに背を向けて勉強したりしながら、以前までは自分もそこにいた練習を、ただ見守る日々でした。なかなか開けない自分の立場への不安と、心底加わりたい練習を目の前に加われない悔しさ、孤独感は耐え難

く、自分で決めた道を後悔し、記念館へ行きたくないと思いました。引退する最後の日まで、苦しかったというのが本音かもしれません。そんな中いつも部員や先輩方、監督部長をはじめ多くの方が気にかけてくださり、話を聞いてくれました。結局最後まで出来ることは僅かでしたが、現役時代にはフィジカルパートナーという役職名を頂き、テーピングやストレッチ、コンディショニングの知識などで頼ってもらえる機会も出来、練習中にフリーで動けるという利点を活かしたサポートで自分の存在を活かすことも出来ました。本来私は人前に立って自分から何かを発信するというのがすごく苦手でしたが、ストレッチやテーピングなどの講座でビクビクしながら話した時にも、部員が真剣に話を聞いてくれました。その度感謝されることや、頼っ

てくれた部員たちが一生懸命に取り組んでいる姿を見ていることがすごくうれしくて、その喜びを励みに、そして自らの使命感にも変えて、引退までの日々を貫きました。

現在は選手としての思いを諦めて専念した学業が実を結び、大学病院で看護師として非常に慌ただしい日々を送っています。整形外科を含んだ病棟に配属出来たため、現役時代に記念館で学んだことも非常に役に立ち、スポーツで受傷し手術を受ける若い患者さんを見ると、いつも体育会で過ごした日々を思い出します。自分が怪我をして手術をした経験、長期のリハビリで辛い思いをした経験など、他の看護師にはない経験を活かした看護が出来るように、体育会で大切な思い出に感謝しながら、これからも頑張っていこうと思っています。

バドミントン部の思い出

平成 23 年卒 真栄城 優

バドミントン部を引退してはや一年が経つ今日この頃、まだ学生を続けている私にとってもあの日々は遠い日の様に感じられる。

少なくとも週5日は出向いていた記念館、総合するといったい何キロ走ったかわからない矢上川と鶴見川、それらに赴くことがない今では同じ大学にいても全く別の生活をしているように感じる。

そもそも私は4月から部活に入ったわけではない。勉強やサークルなど紆余曲折を経て1月にバドミントン部に正式に入部した。当時の私は本当に一日中バドミントンのことを考える人間であった。授業中はバドミントンに配球やショットの打ち方などをずっと考えていたし、授業の合間にはトレーニングルームでウエイトを

する程、バドミントンにどっぷり浸かっていた。それが結果となって表れたのは11月の新人戦だと思う。5回戦まで勝ち進み、秋に3部リーグで戦い負けた相手に再び敗れたもののこの時はファイナル16くらいまで競った試合が出来て自分の中に確かな手応えを感じる事ができた。

そんな当時の私は何事にも歯に衣着せぬ物言いで先輩方の目にとまったと思う(笑)。「他人への配慮なしに己が信ずる道を進む」そんな人間であった様に感じる。・そして私はこの部活で色々なことを学んだ。チームとして行動する中で自分の考えと他人の考えのバランスを調整する重要さ、時には身を削ってチームに貢献することなど集団での身の振り方であ

る。

それが生きてかどうかは定かではないが私は3年の秋に主将となった。ここから先は自分のことだけ考えては到底やっていけない世界である。今まで中学、高校でも部のトップとして活動はしてきたが、実質の決定権は顧問にあるといい。大学では全て自分達で考え、決断は最終的に私がしなくてはならない。正直、言葉にすると簡単ではあるがやってみて初めてこの難しさは実感できる。チームのことを思って考えたことでもその方向性や伝え方次第でそれが部のためにあると部員に思われなければ結局はどんな内容が良くても机上の空論にすぎないばかりか批判もかってしまう。実際、私は多くの人から批判を受けてきたと思っている。もちろんそれは自分の力量のなさが一番の要因だと自覚しつつもここまで他者というものは動かないものなのかということをも身をもって学んだ。

4年時の春リーグで我が部を初めて5部に落としてしまった時にそれは頂点に達したと思う。あの当時のミーティングでの部員達が醸し出す雰囲気というのは今でも忘れられない。出来れば2度と味わいたくないものである。

そんな中でも自分を助けてくれるのはやはり

同じ部員であったり、親しいOBの方など結局は部活の関係者であった。これらがあったからこそその後のチームでどうにか最後までやってこれた気がする。

この様な経験の中で4年時には集団での身の振り方から更に集団を率いる者としての身の振り方を学んだような気がするが「集団の中では結局、自分のことしか考えられなくなったときに大きなミスや失敗をするものだ」ということを今も肝に銘じている。

様々な経験がこの四年であった。そこから何を学んだのかを話せば、切りがない程多くのものをこの部活は私にくれた。特に私の考えからの大きな部分に影響を及ぼした。それは前述したように集団の中での身の振り方ではあるが、やはりプレーヤーとしてのかつての自分の考えも捨てられはしない。そのバランスの取り方、これが非常に重要で難しいものであると私は思うのだ。つまり「慶應バドミントン部員(集団の一員)として常に思いやりをもった人間であれ、プレーヤーとして自分が一番、あるいは一番になるという強い自我を持った人間であれ」それを今後の自分の教訓としてこの先の人生を歩んでいきたい。



「あんた、どうせ暇でしょ？」バドミントン部を引退してから、母から幾度となく言われている言葉です。

現役時代は毎日日吉に通ってバドミントンをしていたため、家にいる時間はあまりありませんでしたが、今では家にいる時間が長く家族をやや心配させてしまっています。「バドミントン部」がどれほど自分にとって大きい存在であったかを感じるとともに、大学時代体育会バドミントン部に入っていなかったら一体どうなっていたのだろうと考えている今日この頃です。

体育会での4年間は、本当に濃密な毎日でした。小学校、中学校、高校と、いろいろなことを経験してきたつもりでしたが、それらが霞んで見えてしまいます。中でも、最上級生としてチームを引っ張った大学4年次は、強く心に残っています。

【普通部コーチ～信頼されるということ～】

私たちの代は、「つながりを大切にする」をモットーに、以前から関係の深かった塾高・女子高のバドミントン部に加えて、普通部のバドミントン部とも関係を深めていくことを決めました。その中で私は、コーチとして普通部と関わっていました。初めの頃は、「もっと普通部とのつながりを強くしなくては」という気持ちが強く、義務的に普通部に足を運んでいる部分がありました。しかし、足を運んでいるうちに、普通部生から「船矢さん、一緒に打ちましょう！」と頼まれたり、アドバイスを求められたりするようになり、普通部の練習に参加することが楽しくなってきました。普通部との関係を深めるという本来の目的を忘れ、「普通部生とバドミントンがしたい」という思いで、足を運ぶこともあったほどです。後輩から、「普通部に行ってくれてありがと

うございます。」と言われることもありましたが、「行きたくて行っているのだから、お礼を言われるのはおかしい」と思っていました。そんな中、顧問の先生から、普通部夏期合宿参加のお誘いを受けました。「船矢さんを信頼しているから、船矢さんにぜひ来ていただきたい。体育会バドミントン部ではなく、船矢さんをお願いしている。」と言われて、鳥肌が立ち、涙が出そうになったことを覚えています。その日から私は、どうすれば信頼を得られるか、またどうすると信頼を損なうかを考えて行動するようになりました。

【早慶戦～悔しさと喜び～】

普通部との関係が深まってきた頃、部は早慶戦を迎えようとしていました。私は選考試合の結果、シングルスに出場することとなりました。4年にして初めての早慶戦出場です。私の対戦相手は、小学校と中学校の時に全国を制し、大学でも4度インカレに出場しており、その差は歴然でした。その中で私ができることは、とにかく粘ってシャトルを相手コートに返し続けることでした。「返し続けるんだ！」練習中、何度この言葉を頭の中で唱えたかわかりません。それにより、早稲田との明らかな実力差はわかっていながらも、何とか抵抗できる気になっていました。どんなショットも触れる気がしていました。しかし結果は、9-21、15-21のストレート負け。わずか数分で試合は終わりました。まったく「返し続ける」ことができず、試合直後はとにかく悔しきでいっぱいでした。大学1年からやり直したい気持ちにかられましたが、OBの方から、「いい試合だったよ。」「お前の試合が一番観客多かったぞ。」「お前、うまくなったな。」などと声をかけられ、「自分の4年間は良

いものだった」と前を向くことができました。バドミントン部を引退して1年が経ちました。この春からは社会人となりますが、バドミントンは続けますし、日吉記念館にも(もちろん普通部、

塾高にも)足を運びます。バドミントン、そして慶応バドミントン部からは非常に多くのことを学びました。その恩を、これから長い年月をかけて返していきたいと思っています。



平成 23 年卒 植田 啓生

慶大バドミントン部での3年間の部活動を振り返ってみた時の一番の収穫は、部活動を通して多くの挫折体験や失敗体験をしたことによって、組織の一員として組織の活動に貢献するためには、まず自分自身が強くあらねばならないと自覚したことであった。そして、組織の活動に対して前向きな成果を提供できるようになって初めて、組織の一員として認められるということを実感した。

私が慶大バドミントン部で執行代として



部活動に関わっていた最後の1年は、慶大バドミントン部がリーグ戦において5部降

格・残留という創部以来最悪の戦績を残す時代となった。原因はいくつか存在すると思われるが、一番の原因は執行代である 4 年生全体の戦力が絶対的に低かったことにより、チーム全体をまとめる求心力やリーダーシップが決定的に欠けていたことにある。私自身、結局最後まで団体戦でチームを代表して試合に出場することはできなかつた上に、チームに勝ち星をもたらすこともできなかつた。真栄城主将（当時）以外で同期部員にリーグ戦のレギュラー選手がいない状況の中、「繋がり」を重視したチーム運営を心掛けた私たちの代は、後から振り返ると残念ながら「団体戦で勝ち星を挙げる」という部の目標設定に見合ったチーム運営ができていなかった。もし、これが民間企業の経営のように収益や雇用といった問題を伴う活動であったならば、企業の経営幹部にあたる私たち執行代は、組織に大きな不利益をもたらした存在であるので、厳しく責任を追及されることになるだろう。大学体育会の部活動の運営には教育的な観点から利潤追求の義務や目標設定がないため、任期を終え、部を引退した私たちが直接チームに対して何か責任を取ることは求められていないが、後輩世代に大きな負債を残してしまったことは、過去に慶大バドミントン部で活動していた人間の一人として、記憶に留め、今後の OB/OG 活動を進めていく上で私たちの代が常に意識しなければならない点だと認識し行動することで、せめてもの部への償いをしたいと考えている。

慶大バドミントン部での部活動を通して、選手としての輝かしい戦績を残すことはできず、個人的な後悔やチーム全体への多大

な迷惑を残してしまうことになった。この場を借りて慶大バドミントン部関係者各位に対して深く謝罪の意を伝えたい。誠に申し訳ありませんでした。しかし一方で、部活動での失敗体験や挫折体験を通して、組織人・社会人として生きていくために必要なくつかの大切な教訓を、身をもって学ぶことができた。これは、私が今後一人の組織人・社会人として生きていくにあたって絶対に必要不可欠な「経験知」となった。具体的に言うと、以下の三点が挙げられる。①組織全体が目標を達成し、高い成果を残し、組織のステークホルダー全体が満足するためには、経営幹部が適切な目標設定と戦略を提示し、それを実行・実現する必要がある。②組織の活動が目標達成に向けて前向きに稼働する好循環を生み出すためには、組織を構成する構成員各人が高いパフォーマンスを発揮する必要がある。③組織が目標を達成し、高い成果を残すためには、組織の構成員各人が組織の経営理念や目標設定を理解・共感した上で、各々がひたむきな努力を重ねることを怠らないことが必要である。上記の三つの教訓を導き出すに至った分析の背景については割愛するが、慶大バドミントン部での部活動における個人的な経験や経営学における組織経営論・リーダーシップ論の先行研究を参考にしている。このような気づきや学びを得られるような貴重な機会を与えてくれた慶大バドミントン部関係者各位に対して深く感謝の意を伝えたい。誠にありがとうございました。

以上三点の「経験知」が提示する教訓は、客観的に見るとそれほど新鮮な内容ではない。むしろ、至極当たり前のことを言って

いるに過ぎない。組織運営に目標設定と戦略が大切なのは当然であり、組織の構成員が組織の活動に対して積極的に関わり高いパフォーマンスをもたらすことが必要なのは、競争社会における組織の生存を維持するためには絶対不可欠なことである。しかし、組織人・社会人として活躍している人間の目からしたら当たり前のように思われることですら、現役部員当時の私には自覚すらできていなかったのである。なぜなら、慶大バドミントン部に所属していた当時の私にとっての部活動における最大の目的は、「体育会というブランドのある学生組織に所属し続ける」こと自体にあったため、自分自身が部に所属するバドミントン選手として成長することや一部員としてチームの活動に貢献することにほとんど興味がなかったからである。今から振り返ると、本当に恥ずかしい上に、真剣にバドミントンに取り組んでいた部の仲間たちに対して失礼な姿勢であったと思う。誠に申し訳ありませんでした。

親切心から私に対して誠実に関わって来てくれた多くの仲間や先輩方のご厚意を裏

切るような言動をしてきたことを、改めてお詫びする。その上で、貴重な学びと反省と気づきを得る機会を与えてくれた慶大バドミントン部に対して精一杯の感謝の意を込めて、創部 70 周年のお祝いと今後の一層の発展を祈願致す。誠にありがとうございました。

なお、最後に近況の報告を記す。2012 年現在、私は慶應義塾大学大学院政策・メディア研究科修士課程に所属し、国際労働経済学の観点から外国人労働者政策の研究を進める一方、学外のインカレ学術系ディスカッションイベント主催団体「国際学生シンポジウム運営委員会」に執行幹部の運営委員(貿易政策分科会チーフ)として関わり、昨年 12 月 26 日から 28 日にかけて「第 33 回国際学生シンポジウム」を開催。本イベントは団体設立以来過去最高の集客人数を記録し、無事イベントを成功させることができた。慶大バドミントン部での失敗体験を通して得た教訓が、今の成功体験に繋がったことを、心から感謝している。この場を借りて厚く御礼を申し上げたい。本当にありがとうございました。



現役を引退して 1 年以上が経ち、現在は大学院で勉学に励んでいます。今改めて慶應義塾体育会バドミントン部の魅力は何かと考えたとき、その 1 つが縦のつながりの強さだと感じています。

私が初めてバドミントン部に関わったのは、女子高バドミントン部に入部してから、数か月経ったときでした。その時現役の男子の先輩に練習に来ていただいたことを、今でも覚えています。現役のときに、私も同期男子を連れて女子高の練習へ行きましたが、その時に入りにくそうにしていたのを思い出すと、本当に有難いことだったと感じます。また、女子高の先輩には頻繁に練習等にお越しいただき、高校の時に関わったことがない先輩も、女子高の頃から、いつも親身に接してくださいました。私が入部したのも、そのように体育会の先輩方と接する中で、1 つの目標に向かって、全員が切磋琢磨できる環境の魅力を知ったことがきっかけでした。

そして女子高ということだけで、大学入学前から練習にも誘っていただき、正直始めは、断れなくてどうしよう、と思っていた部分もありました。それでも他のサークルを考える中で、バドミントン部の魅力に惹かれ、4 年間頑張りたいと思うように至りました。

このように、私自身がバドミントン部に入るきっかけとなったのが、女子高バドミントン部でした。そして入部してからは、さらに、幼稚舎生から OB・OG の先輩方までの強いつながりを感じる経験をさせていただきました。

今振り返ってみても、現役だけで活動するのがほとんどないと言うくらい、4 年間の部活動で、たくさんの方々に支えていただいたことに

気が付きます。

入部して初めてのリーグ戦では、男女共に昇格をかけた入替戦に臨み、応援席を見れば、他大を圧倒するような大人数の慶應応援団が声援を送って下さる姿に、私自身も圧倒されていました。初めての早慶戦では、それまで女子高の手伝いとして遠目に見ていた主将戦を、実際にコートを囲む側に入って応援する中で、現役以上に応援に熱の入る先輩方を見て、改めてバドミントン部の凄さを感じました。新年会では、楽しそうにバドミントンをする塾高生、女子高生、普通部生、幼稚舎生に刺激をもらいました。その他会合では、初めてお会いする方でも、当時はわりと人見知りだった私にも気さくにお話ししていただき、頑張れといってくださいました。合宿や練習では、下手な私の打つ相手をしていただいた時、いつも細かくアドバイスを下さり、どうすれば癖を直せるか、一緒に考えてくださる先輩もいました。

私はまだ学生なので時間に融通は利きますが、先輩方のほとんどがお仕事をなさっていて、それぞれの予定もあり、お忙しい中、関わらない代でも叱咤激励して下さり、それらがどれほど有難いことであったか、また先輩方のバドミントン部を大事にしている気持ちを身に染みて感じました。

試合の時にはわざわざ遠くまで足を運んで下さり、お忙しい中、頻繁に日吉へ足を運んでくださる先輩方、メールで激励の言葉を下さる先輩方の存在は、現役のときの私にとって本当にとっても大きな存在でした。4 年生の時は、私たちの先輩方の存在感が大きかったため、昨年より会合や試合、練習に来る人が減ったらどうしようと不安に感じることもありましたが、

そんなことを考えていたことが申し訳ないくらい、先輩方は変わらぬご支援をしてくださいました。その度に感謝の念を抱き、より一層頑張らなければと奮起させていただきました。

そのため今でも、少なくとも自分が現役の時に関わった代がいる間は、記念館や試合会場に足を運んで、少しでも現役の力になろうという原動力にもなっています。

このようなつながりが 70 年続いて来たことはとても素晴らしいことだと思いますし、その中で微力ながら一つの働きができたことは嬉しく思います。そして、現役がより魅力的なチームを

目指す中で、私が先輩方にさせていただいたように、力になれることは力になっていきたいです。



現役時代を振り返って

平成 23 年卒 清家 薫

1 年以上前にバドミントン部を引退しその後卒業、社会人となりましたが、その社会人生活も残り数カ月で 2 年目に突入するという現状で、時間は怒涛の勢いで過ぎていくと実感する日々です。バドミントン自体は数カ月に 1 回程度の割合でしかしなくなりましたが、今でも現役時代の様々な経験は私の中でしっかり生きています。社会人生活にすっかり慣れた今改めて、自分自身の現役時代を振り返って思うことを述べてみたいと思います。

私は初心者として体育会に入りました。今思うとよくそんな思い切ったことをしたものだとも思いますが、もともとラケット競技が好きで、高校時代の体育でバドミンントンの授業を取り、それがとても楽しくて、「この競技はもっと上手くなれたら絶対もっと楽しくなる」と思ったのがきっかけです。

正直なところ、当初はバドミントンがいかに厳しい競技であるかということほとんど理解していなかったため、「ラケット競技は慣れているから、がんばればすぐ周りの部員に追いつけるだろう」と非常にポジティブな考えを持っていました。しかしその考えは入部して割とすぐに打ち砕かれました。

最初に甘い考えを持っていたからこそ、それに反してなかなか上達しない自分が嫌になり、バドミンントンの楽しさがわからなくなってしまった時期もありました。そんなときは、自分の運動神経が悪いとかセンスがないとかおかしな方向にネガティブになっていきましたが、そういった状況を脱したきっかけは当たり前のようなのですがやはり、ちょっとした瞬間にバドミンントンの楽しさを感じられるようになってきたことでした。基礎打ちが良い感覚で打って楽しか

ったり、ダブルスの試合で珍しく前衛が決まって楽しかったり、「楽しい」と思う瞬間が増えていくことで、もやもやとした気持ちはなくなっていました。

単純ではありますがこのような経験から改めて思うことは、バドミントンでの悩みはバドミントンをもってしか解決できないということです。バドミントンが楽しくなければ楽しく感じる瞬間を増やさなければいけないし、できないことはできるようにするしかない。そう考えると、3年半という現役の活動期間はとてつもなく短いように感じます。全力でバドミントンと向き合うからこそ自分のだめな部分なんて山のように出てくるのに、それをできる限り解決しなければならないし、1つ解決したところで新たな課題がどんどん出てきます。想像するだけで途方もない作業であり、現役時代の私にもそのための3年半が用意され

ていたわけだから、言い訳するひまも目をそらすひまもなかったのだと思います。

当時の私に戻ることはできないし、引退してからはっきりと気付いたところでどうにかなるものでもありませんが、だからこそ今の現役部員、そしてこれから入部してくる部員には、用意された現役期間を精一杯駆け抜けて行ってほしいと思います。そしてそのためにも、微力ではありますが私自身何らかの形で力添えできればと思っております。



4年間を振り返って

平成 24 年卒 竹内 裕詞

4年間を振り返って、僕が慶應義塾体育会バドミントン部で学んだことは「自分と向き合うこと」だったのではないかと感じています。その中でも特に、一番自分と向き合った4年生の時のことを書きたいと思います。

僕は現役4年間の半分くらいを、腰の怪我のため、みんなと一緒にコートに入ることができませんでした。高校の時までは、怪我などしたことがない僕にとって、怪我をしてバドミントンが出来なかった時間は、とても苦しいものでした。しかし、その分自分と向き合い、自分にと

って大切なことを見つけることができたのかなと思います。

4年生になり、怪我から復帰し、みんなと一緒に秋リーグを目指すにあたって僕が1番心がけたことは「勝つ」ということを強く意識することです。怪我をして、長期離脱していた自分を試合で使うことはとても不安なことだと思います。「本当に怪我が治ったのだろうか？」「試合で使っても大丈夫だろうか？」そんな不安要素を取り除き、誰の目から見ても「竹内なら必ず勝ってくれる」と思わせるには、部内の練習におい

でも、試合においても「どんな相手にも勝つ」ということがとても大事だろうと考えました。そして、その姿を後輩に見せることが、自分の副将としての役割なのではないかとも思いました。

そんな風に考えたものの、「勝ち」意識すればするほど、緊張したり、堅くなってしまい、思うようなプレーが出来ないことも多くありました。しかし、そうやって上手くいかない中でも「勝ち」にしっかり向き合ったことで、自分なりのプレースタイルを見つけていきました。それは「ベストプレーではなく全力プレーを!」、「本気で取り組む」、「最後まであきらめない」この3つです。全力でプレーし、本気で取り組み、最後まで諦めないからこそ、それでも出来なかったら自分の力不足だ、と敗因を分析できるようになりました。また、全力でプレーすることに集中することで良い意味で結果を気にせず、プレーに集中することが出来るようになりました。

しかし、秋リーグ戦での全勝や、早慶戦での勝利はこのように自分と向き合って、全力でプレーした結果ということだけが要因ではありません。怪我をしてプレーできない時に、声をかけて、励まして下さった諸先輩方の支え。「一緒に頑張りましょう」と共に涙してくれた後輩達。

復帰してから、自分を信じて試合に出してくれた五月女監督や山口哲生主将、戦う自分を必死で応援してくれた仲間の姿。沢山の人の支えがあったからこそ、「慶應義塾」という名を背負うという意味をしっかりと考え、最後の結果につながったのだと思います。本当に感謝してもしきれないくらい、感謝しています。

そして何よりも、こんな風に「自分と向き合う」ということを、目一杯させて下さったこの慶應義塾体育会バドミントン部というものに感謝するとともに、自分がその一員であることを誇りを忘れずに、これから新しく始まる社会人生活でも、しっかりと自分と向き合い、僕らしく全力で頑張っていきます。



(引退後、同期での飲み会の写真)

4年間を振り返って

慶應義塾体育会バドミントン部創部 70 周年おめでとうございます。そして、その記念部誌に寄稿出来ることを光栄に思います。拙い文章ではありますが、私の体育会バドミントン部での 4 年間の思い出を書かせていただきます。

4 年間を振り返ってみると、悔しいこと辛いこ

平成 24 年卒 野村 和秀

と楽しいこと嬉しいことたくさんありました。そもそも入学当初は大学で、ましてや体育会でバドミントンをしようとは思っていませんでした。高校で一区切りついた感じがありましたし、新しい分野に挑戦したい気持ちもありました。入学式の日には銀杏並木でバドミントン部のブースを偶然見かけ、興味本位でチラシをもらい、新入

生練習会に参加し、気がつけば部員の一人として練習していました。もしあのとき並木でバドミントン部のブースを見かけていなかったら、今の僕はなかったかもしれません。

一年生の頃はもう日々の練習についていくだけで精一杯でした。一年間浪人していたので体力的にも技術的にも衰えており、先輩たちの迷惑にならないようにしないと、という気持ちで練習していました。また、練習だけでなく一年生としての仕事もありますし、一人暮らしをしていたので家事や自炊などもあり、最初の一、二カ月はこの生活に慣れるのが大変でした。朝起きて、授業を受けて、練習して、帰るといふ高校生時代と変わらぬ生活に、最初ころはそのままバドミントンばかりしていて大丈夫かな、と不安になったこともありました。しかし、春のリーグ戦を見てその不安は一気に消え去りました。これまで経験したことのない緊張感ある試合、迫力ある応援、選手と応援が一体となって戦っている様を見て、自分もいつかこの舞台に立ちたいと思うようになったのです。

それから2年たって私はリーグ戦の舞台に立つことができました。しかし、わたしのリーグデビューはこれ以上ないほど苦いものでした。私は一度も勝てず、チームも全敗し我が部史上初の5部へと降格したのです。私は、決して技術的な部分では相手に負けていなかったと思っています。それでも負けた理由は、気持ちの面で準備不足だったからだと考えています。リーグ戦の雰囲気、周りの応援、自分が負ければチームも負けるといふ状況、自分を緊張状態に追い込もうとする要素に打ち克つことができませんでした。そして緊張状態に陥ってからも自分を取り戻すことができませんでした。応援をしていた下級生の頃から、ただ声を枯らすだけでなく自分がレギュラーになったつもりでリー

グ戦を見ていれば、また日々の練習からリーグ戦の一場面一場面を意識して取り組んでいれば、もっと気持ちの面で準備ができていたのではないかと思います。

5部に降格させてしまったときは、この部の歴史を作り上げてこられた先輩方に申し訳ない思いでいっぱいでした。そして、少なくとも自分たちがこの部にいる間に、このチームを3部に戻さなくてはならないと思って残りの日々を過ごしてきました。結果的にそれを達成することはできなかったことには悔いが残っていますが、最後のリーグ戦でなんとか4部昇格を果たせたことは今でもいい思い出です。以前の苦い経験から、本番でベストなパフォーマンスするにはどういう準備をすればいいのか自分なりに考えて取り組んできたので、試合ではいつも通りの自分を出すことが出来ました。このリーグ戦での4部昇格は達成したい目標ではなく、達成しないといけない目標だったので、入替戦の勝利が決まったときは嬉しいというより、「ほっ」とした気持ちの方が強かったのを覚えています。

字数の関係でここに書けないこともまだまだあり、私の4年間は本当に刺激的な日々だったなと感じます。この経験を通して、何かに本気になれるって素晴らしいことだなと思うようになりました。辛い思いもしたり、悩んだり、仲間と競争したり、たまに衝突したり、共に喜んだり、必ずしも楽しいことばかりではないですが、そういうことを通して多くのことを学び、人として成長できるのだと私は思います。そしてそのような環境が備わっているバドミントン部で大学生活を送ることが出来て本当に良かったです。

いよいよ私も2012年4月から社会人となります。もちろん不安もありますが、これからの人生のことを想像すると楽しみの方が大きいです。

これからは仕事に本気に取り組んでいく日々になりますが、バドミントン部で学んだことを活かして頑張ります。最初の勤務地が愛媛県ということで、日吉に顔を出すことは難しくなりますが、現役のことは離れたところからでも応援していますし、一人のOBとしてバドミントン部の発展に貢献していくつもりです。



4年間で振り返って

平成24年卒 植田 悠

現役最後の試合である「早慶戦」から、早3ヶ月が経とうとしています。月日の流れは本当に早く、気がつけば学生生活も残り僅かとなりました。これまでバドミントンを通して本当に沢山のことを経験し学び得ることができました。バドミントンを通し、沢山のことを経験する中で競技者としても人間としても成長することが出来、多くの人と出会い関わることで新たな見方を見つけることも出来ました。今私は、バドミントンと出会えたことをとても幸せに感じています。

この4年間は私にとって特に自分を成長させることが出来た4年間であったと思います。4年間の中で私には大きな目標がありました。それはインカレに出場することです。私は4年最後によく名古屋で行われたインカレにシングルスで出場することができました。結果は振るわず悔しい結果となりましたが、4年最後に出場することができたことは本当に良かったと思います。私は一年生の時からこの大会に出場することを大学生活での一つの目標として強く持ち続けてきました。なぜそこまでインカレに出場したかったのか。それは、どんな環境でも諦めず努力をすれば高い壁も乗り越えられるの

だということを証明したいという思いがあったからです。この目標を達成することは決して簡単なことではありませんでしたが、その過程で様々なことを経験し多くの大切なことに気づくことができました。

目標に向かう中では、もちろん辛い経験もありました。怪我でプレーできず悔しい思いをしたことや自分のプレーに行き詰ってしまったこと、自分の目標に向けてどのように頑張っていけばよいのか悩んだこと・・・しかし、そのような経験をしたからこそ気づくことができた大切なことが幾つもあります。

「ライバルの存在の大切さ」

大学に入ってから、自分では頑張っているつもりでもなかなか結果に繋がらないことや、やる気がでずに悩む時期がありました。そんな時、他大学に練習にでる機会ができライバル達と一緒に練習することができました。その中で、もっと頑張らなければ目標達成は出来ないという危機感を感じたり、自分はまだまだ甘んじ厳しさが足りないと痛感したり、部活の中だけで練習していると忘れてしまう重要なことに気づ

かされました。振り返ると、ライバルの存在があったからこそさらに上を目指して頑張ろうとおもえたのだと思います。

その存在は本当に大切なものであると改めて気づくことができました。

「何かを変えようとする勇気の大切さ」

やはりどんなに沢山練習し努力しても、プレーが行き詰ってしまうことがあります。私のシングルスはプレーの幅が狭くショットも単調で粘りでなんとか戦っていました。どうにかしてこのプレーを変えなければと悩んだ時、今の自分のスタイルから何かを変えようと思いました。打ち方や打つタイミングをいつもと少し変化させてみたり、動くスピードを変えてみたりと様々なことを試みました。自分のスタイルを変えることに抵抗や不安がありこれまでは変えようとはしていませんでした。しかし、何か変わるかもしれないということを信じ行動した結果、これまでにない新たな発見をすることができ、またいつもの形よりも変えた時の方が良いと思えることもありました。もちろん良いものを変える必要はないと思いますが、悩んだりした時に勇気をもって何かを変えてみようとする事もとても大切であると感じました。

「自分を信じることの大切さ」

練習ではできていても試合になるとできないことがあります。私は大学時代、特にそうでした。試合になると突然不安になり、できないのではないかと考えてしまうこともありました。そう考えた時はやはり本当にその通りになってしまい、ますます自信がなくなっていました。そういった経験をする中で、自信をつけるにはそれだけの練習をすることが必要であると思ひ不安が

なくなるまで必死に練習するようになりました。また、マイナス思考にならない様日頃から気をつけました。それからは、以前に比べてずっと自信を持って試合に臨むことができ、落ち着いてプレー出来るようになりました。

このように様々な大切なことに気づいていくうちに技術面でもメンタル面でも成長することができ、そしてインカレの出場権を獲得することが出来たのだと思います。一年生の頃から目標にしていたインカレ出場まで4年間もかかってしまいましたが、その過程で経験した辛いこと・苦しいこと・嬉しいこと・楽しいこと・すべてが私にとってとても意味のあるものであったと強く感じています。この4年間目標に向かって諦めずひたむきにやってきたことが結果に繋がり、そして自分自身で成長できたと感じられたことは本当によかったです。

おわりに、私がこの4年間を無事に終わられたのは、いつも指導して下さった先生・監督・コーチ、応援して下さいましたOBOGの皆様方、共に頑張り支えてくれた仲間、そしていつも陰で支え応援し続けてくれた家族など私に関わる多くの人の支えがあったからこそだと思ひ、感謝しています。本当にありがとうございました。これから先、社会人になってもこれまでの経験を活かし自分らしく前向きに頑張っていきたいと思ひます。



近況・四年間を振り返って

平成 24 年卒 松本 悠莉亜

昨日、1月16日によく卒論を提出し、ほっと一息ついたところでの執筆です。と言いたところですが、全員まさかの再提出を命じられ、あと一週間頑張らなくてはならなくなりました(笑)。とはいっても、昨日に全てから解放される予定で、友達と会う約束など入れてしまったため、どれだけ改善できるか不安なところです。木曜には、20代のうちに賢いお金の使い方をするために、生協の案内で知ったライフプランセミナーにも行く予定です。新聞を読む余裕も出来ましたが、結局、咀嚼しながら集中して読むのはスポーツ選手の取材記事です(笑)。やはり興味のわくものは自分の経験に起因するものなのだと思い、これから色々な場所にいきいたいなど、うきうきしています。卒論執筆にあたり、実は部のOBの方々にも大変お世話になりました。おかげさまで現場の方のお話を伺うことができただけでなく、それぞれの方が担う使命に理念を持って取り組まれる姿に、感銘を受けました。これから社会に出る上で、私もこのようにありたいと、良い刺激をいただいて、感謝の気持ちでいっぱいです。この時に限らず、部のOBの方々には、いつも良くしてもらってばかりで、自分は本当に幸せ者だと思っています。

この時期になって、やっと一息つけてくると(まだついたらだめですが)、現役時代のことが客観的にみられるようになった気がします。間違いなく相当追い込んだ生活でした。「起きて、駅まで歩く間や電車で勉強、授業に出、部活をし、帰りは電車で練習の反省をしてからまた勉強(しかし寝てしまい自己嫌悪に陥ること多々)、そして遅く帰宅し食べて寝る」といった

毎日で、そこにさらに精神的負荷が加わるという……今振り返ると異常だと思います(笑)。しかし、自分の限界に挑戦したいと、入学当初は思って入部したのですし、こういう追い込みをすることで新たな自分を発見したかった、そしてそれが実際に出来たので、良かったのかなと思っています。多くの方が仰いますが、4年間部活をやり続けるということは、すごいことだという意味が、何となくわかった気がします。これだけ辛い思いをして、毎日一つのことを忘れずに過ごす、そのことで得た経験は、他とは重みが違います。あの時何であんなこともできなかったのだらうと、悔やむことも多々ありますが、ここまでして得た経験は、必ずや活かしてやろう、活かさないでたまるかといった、絶対的効力を有します。

部活を通し学べて良かったと思う点は、今のところ4つ挙げられます。一つは、少し、踏ん張った先に見える楽しみがあるということ。トレーニングをすれば、大抵のことはできるということ。次に、結果は自分の思っている通りになるということ。つまり、何をやるにも自分にとっての最終的なゴールを見失わずに位置づけることが大事であるということ。3つ目に、とにかく前向きであることが一番良いということ。楽しむ努力が大事であること。最後に、自分を大事にしなければ、本当は他の人の力にはなれないこと。もう少し時間が経てばまた何か出てくるのかもしれませんが、これからも考えてみたいと思います。

ここまで、部の70周年を記念する大事な誌面に、私のくだらない近況や振り返りをさせていただいて誠に恐縮な限りです。現役時代

に、大したことは何もできなかった私ですが、そんな未熟者の私を温かく支え、励ましてくださった全ての方々に、改めて感謝申し上げます。ありがとうございました。

それでは、昨日母から「卒論は死ぬまでついて回る」と脅されたばかりですので、あと少し頑張ろうと思います。

